ＩＳ　　転生の翼

御坂弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　転生の翼

【Ｎコード】
Ｎ８６５７Ｘ

【作者名】
御坂弟

【あらすじ】
神の手違いで死んだ俺は神から転生させてもらえる事になった。
文章力が無いですが宜しくお願いします。

プロローグ（前書き）

あまり小説を書いた経験が無いのでへたくそですが宜しくお願いします。

プロローグ

とある日の夕方

「ふう、やっと新作のプラモが買えたぜ。」

「さっさと帰って作り始めるか。」

俺は最近出た新作のプラモが買えて調子にのっていた

そんな俺の視界に横断歩道の上で座っている猫が入った

そしてそのすぐ近くまで車が迫っていた

「なっ！アブねえ！」

俺はとっさに猫に走りより、横断歩道の向こうまで投げ飛ばした

ドンっ！

猫を投げ飛ばした俺は猫の代わりに車にはねられた、

そして徐々に視界が薄れて行く中、思った

『せめて、これを作りたかったな。』

そして俺の視界は真っ暗になった

プロローグ（後書き）

ぜひ次も宜しくお願いします。

神様（前書き）

連続投稿です。

神様

俺は目が覚めると一面真っ白な部屋だった

「なんだここ、心理の扉でもありそうだな。」

『そんなものは無いよ」

「うわぁっ！何時からいたんだよ。」

俺の後ろにいかにも神ですみたいな人がいた

『みたいなじゃ無くて本物だよ。』

「えぇっと、俺死にましたよね？」

『ええ、あなたは猫をかばって死にました、しかしその猫が私の親友のペットだったのです。
それで彼がキミを転生させてほしいと言ってまして、あなたが行きたい世界に転生させる
ことになったのです。』

「マジですか？」

『マジです。』

「どこでもいいの？」

『はい、どこでも良いです。』

「じゃあ、ＩＳの世界が良いです。」

『ええっと、体などはどうします？』

「じゃあ、体はｈａｃｋのハセヲで身体能力は最高まで、ＩＳは俺の知ってるガンダムの機体で。」

『わかりました、それではあなたを原作開始の少し前に落とします。』

「え？落とす？」

『はい、落とします』

神様がそういうと俺の下の地面に穴が開いた

「そういうことかぁーーーー！！」

案の定俺は暗闇に落下した

神様（後書き）

次回は早めに更新します。

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です。

主人公設定

名前　神杉来斗

見た目　ｈａｃｋのハセヲ似

年齢１７歳

好きなもの　プラモ、本、甘いもの

嫌いなもの　他人を見下す人間、コーヒー

使用機体　ヴァリアス

主人公説明

他人を見下す人間が嫌いで基本的にそれ以外の人には優しい。
神に転生させられた後、篠ノ之束の隠れ家の近くに落下、突然現れたのと
束の作っていないコアを持ったＩＳを持っているということで気に入られる。
その後束の頼みでＩＳ学園に行くことになる

機体説明

ヴァリアス

来斗の記憶にある、ガンダムに出てきた機体がベースで出来る
その場の状況によって好きな機体を選べる
しかし、強力すぎる武器にはリミッターがかけられ、機体にも
リミッターをかけている。

篠ノ之　束（前書き）

全然束のキャラがわからない。
かなり束のキャラが違うかもしれませんがご了承ください。

篠ノ之　束

暗闇の中で一人の女性がキーボードを動かしていた

『ん、なんだろ、この反応は、ＩＳのコアにしては少し違うな、しかも突然現れたし。』

女性はウサミミをつけていて、目の下にはクマが出来ていた。

『すぐ近くだし、少しだけみてみようか。』

女性はそういうと暗闇から出て行った

来斗は今気絶している、神に落とされた後、比較的低い所から出てきたのだが、

打ち所が悪く、気絶してしまったのだ

『おぉーい、きみ、起きなよ。』

「う、ううん？あんた誰？」

『そういう時はそっちから名乗るものだと思うけど。』

「ああ、すいません、俺は神杉来斗です。」

『じゃあ、らーくんだね、私は天才の篠ノ之束さんだよー。』

（らーくんってなんだよ、ていうかいきなり束さんに遭うってどうよ。）

束「そういえば、らーくんのそれ、ＩＳ？」

束の視線の先は俺の人差し指の指輪

「たぶんそうだと思います。」

束「たぶんって言うのも気になるけど、もしかしてらーくん動かせるの？」

「はい、操縦はよくわかりませんが。」

束「誰が作ったの？」

（ああ、どうしよう、神が創りましたなんていえないし。）

『来斗さん、来斗さん。』

（あれ？神様？）

『はい、いまあなたの状況を見ていましたが、今の貴方の体は全てがオーバースペックですが
それは知能の良さも例外じゃありません、今の貴方は篠ノ之束と同じくらい良いので
ＩＳくらいなら作れるので、自分で作ったと言ってください。』

（ああ、わかった。）

「自分で作りました、前にちょっと実物を見たら意外に作れそうだったから作りました。」

束「ええ～！？ほんとに？らーくんもすごい天才だねぇ。」

「そうでもないです、所で、しばらくの間泊めてくれませんか？家が無くて。」

束「だったらＩＳ学園に行ったら？あそこなら男性のＩＳ操縦者だって言えば入れるよ
それまでの間はここにいて良いけど。」

「じゃあ、そこに行って見ます。後少しコイツを弄りたいんですけど。」

人差し指のヴァリアスを指差す

束「じゃあ、この束さんの研究所を使うと良いよ。
天才の研究所だからね、ほとんどの物が作れるよ。」

「ありがとうございます。じゃあよろしくお願いします。」

束「じゃあ、研究所に行こうか。」

「あれ、でも見当たらないですよ？」

束「この束さんが普通の所に作るわけないじゃないか。ポチッとな」

束がスイッチを押すと地面がスライドして階段が現れた

束「じゃあいこうか。」

「はい。」

そういえば機体は何を使おうか。

原作開始まで二ヶ月程度あるしじっくり考えるか。

篠ノ之　束（後書き）

ほんとにセシリア戦辺りどの機体を使いましょうか。

福音辺りの機体は考え付くんですがね。

ＩＳ学園（前書き）

遅くなってすいません、バカテスのほうも明日、明後日には投稿します。

ＩＳ学園

俺はあの後研究所でヴァリアスを調べてみたけど

本当にガンダムに出てくる機体になれる様になっていた

後はほかの機体の武装も使える様になっていた位かな

それと操縦の練習もしてみたら、何故かすぐ理解できてかなり上達した。

たぶん、神様が気を利かせてくれたんだろう、

後サポート用にハロを作ってみたら、束さんが気に入って欲しいというので

ミニサイズのハロを作ってあげた。

そのお礼と言って、バイクを作って貰った

そしてすぐに二ヶ月が過ぎ学園に行く日が来た

「それじゃあ、ありがとうございました。」

束「うん、何か用があったら電話してね～。」

うん、やっぱり原作みたいに興味を持った人には優しいみたいだ。

俺は束さん特製のバイクを使いＩＳ学園に向かった

ＩＳ学園

そして俺はＩＳ学園に着いた

聞いた話だと迎えの教師がいるらしいけど。

？「すまない、少し遅れてしまった。」

「いえ、今来たばかりです。」

千「そうか、私がお前のいくクラスの担任の織斑千冬だ。」

おお、やっぱりすごいオーラが出てる

「神杉来斗です。」

千「すぐに入学式が始まる、移動するぞ。」

「はい。」

暇な入学式は寝て過ごし、今は自己紹介のじかんだ

山「それじゃあ、出席番号順に自己紹介をしてください。」

この人が山田先生か、やっぱり小動物系だな、背は小さいのに

胸だけはでかい

そして順番に自己紹介している中、寝ている奴が一人、

あれが一夏か、山田先生が起こしてるのに中々起きない。

おっ立ち上がった、

一「えー・・・、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

えっと・・・終わりじゃないよな。

一「以上です。」

おいおい、マジかよ、何人かずっこけてたぞ

すると千冬さんが教室に入ってきて、一夏の頭を出席簿で殴った。

『スパァン』

あれ出席簿の音じゃねえぞ、下手したら死ぬ

一「げぇっ、関羽！？」

いやいや、もう人間ですらない、サーヴァントじゃねえの？
だとしたらセイバーかな。

『ガッ』

「危ないじゃないですか。」

千「チッ、余計な事を考えるからだ。」

今の音は出席簿をナイフで防いだ音だ

ていうか今舌打ちしたよな！？

それに何で分かったんだ？

山「織斑先生、会議は終わったんですか？」

千「ああ、クラスの挨拶を押し付けて悪かったな。」

山「いえ、副担任ですしこれ位しませんと。」

どうやら織斑先生が自己紹介をするみたいだ、

千「諸君、私の役目は君たち新人を一年で使い物になるまで育てる事だ。
私の言うことはしっかり聞き、理解しろ。逆らってもいいが、言う事は聞け、いいな

ん？なんか嫌な予感

その瞬間

『キャーーーーー！！」

黄色い声援が響いた。

う、うるさっ、

くそ、忘れてた

まだ何か行ってやがる。

千「以上でＳＨＲは終わりだ、諸君らには半月で基礎知識を覚えて貰う。

その後基本動作を半月で覚えろ。いいか、いいなら返事をしろ、良くなくても返事をしろ、いいな！」

『は、はい！』

ふう、やっと終わった、

一夏と話て見るかと思い、一夏の席に向かおうとしたら、ポニーテールの少女

篠ノ之箒につれていかれてしまった

はあ、しょうがない次の時間にするか

そして二時間目

一「ほとんど全部分かりません」

一夏がぼけていた、だっておかしいだろ、
何で電話帳と間違えるんだよ。

とそんな事がありながら二時間目が終わった。

そして一夏が話しかけてきた

一「よう、俺は織斑一夏、同じ男同士仲良くやろうぜ。」

「ああ、俺は神杉来斗、来斗って呼んでくれ。」

一「ああ、宜しくな、来斗。」

？「ちょっとよろしくて？」

一「ん？」

「あぁ？」

？「まあ、なんですの、そのお返事。このわたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから
それ相応の態度というものがあるではないかしら？」

「「・・・・・・」」

うん、こういうのは相変わらず苦手だ、一夏も同じなようだ

一「悪いな、俺君が誰か知らないし。」

セ「私を知らない？イギリス代表候補生にして入試主席のセシリア・オルコットを？」

一「質問いいか？」

セ「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

一「代表候補生ってなに？」

『『がたたっ』』

おいおい、また何人かずっこけたぞ。

「おい、マジで知らないのか？」

一「おう、知らん。」

セ「信じられませんわ、極東の島国と言うのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ。」

「一夏、代表候補生って言うのは国家代表ＩＳ操縦者の候補生ってことだ。」

一「確かにそんな感じの名前だな。」

セ「そう、エリートなのですわ！」

セ「本来ならわたくしのような人間とクラスを同じくするだけでも

幸運なのよ。おわかり？」

「「そうか。それはラッキーだ。」」

セ「・・・バカにしてますの？」

セ「大体、貴方たちＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。」

一「俺に何か機体されても困るんだが。」

「お前の方がバカだろ、俺よりＩＳに詳しいのなんて束さんくらいだぜ。」

セ「なにを言ってますの、そんな訳ありませんわ。」

「まあ、信じるも信じないもお前しだいだ。」

キーンコーンカーンコーン

セ「また後できますわ、逃げないことね！よくって！？」

また来るのかよ、めんどくさい

千「さて、この時間はまず再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。」

うわ、めんどくさいな。

『はいはい、織斑君を推薦します。』

一「えっ、おれ！？」

ドンマイ一夏

『じゃあ、私は来斗君を推薦します。』

千「では候補者は織斑と神杉でいいか？」

一「ちょ、ちょっと待った俺はそんなのやらーーーーーー」

千「自薦他薦は問わない。」

一「い、いやでも。」

あきらめろ、決定事項だ

セ「待ってください！納得がいきませんわ！」

きたよ、うざいのが

セ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！
わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

マジでうざっ！

セ「実力でいけばわたくしが代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で

極東の猿にされてはこまります！」
俺が猿ならあんたは何だよ？
あんまり調子に乗るなよカス
セ「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、
わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――」
ブチっ
「いい加減にしろよ、カスが！黙って聞いてりゃいい気になりやがって！
大体その後進的な国で開発されたＩＳの代表候補生になったからって、
威張ってたのはどこのカスだ！」
一「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」
セ「なっ！？貴方たち、わたくしと祖国を侮辱しますの！？」
「あんたの態度を見てると格下には侮辱してもいいって言ってるようなもんだぜ？」
セ「わたくしがあなたより劣ってると申しますの！？」
「ああ、そうだね。俺より優れていると言いたいならＩＳのコアぐらい作れるようになれよ。」

『無理だよ、神杉君、ＩＳのコアは篠ノ之博士意外に作れないんだから。」

「俺は作れるぜ、しかも篠ノ之束のお墨付きだ。」

セ「っ！決闘ですわ！」

「別にいいぜハンデはどのくらいつける？」

セ「あら、早速お願いかしら。」

「いや、俺がハンデをつけるんだよ。」

そういうと、クラスで爆笑が巻き起こった

『本気で言ってるの？神杉君？』

『男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

「でもそれはＩＳが使えたからだろ。俺らはＩＳを使えるからここにいるんだぜ？」

『でも相手は代表候補生だよ？」

「代表候補生は一部を除き、その国の人しかなれないから、国のレベルが低ければ代表候補生だって弱い。」

「大体俺は篠ノ之束に並ぶ天才だぜ？そんなカスに負ける訳が無い。」

千「さて、話はまとまったな。それでは一週間後の月曜に勝負を行う。
織斑と神杉とオルコットは用意をしておけ。」
さあて、どうあそんでやるか

その後、とある教室

？「過去の経歴が不明、ノーナンバーのコアの機体を使う男ねえ。
さらにコアを作れるとは。
しかもいきなり代表候補生に勝負を挑むなんて。
ふふ、面白い人ね。」

ＩＳ学園（後書き）

とりあえずセシリア戦の機体は決まりました。
何なのかは次回あたりに。

同居人？（前書き）

すみません、結構読みづらいかもしれません

同居人？

放課後、俺は一夏とともに机にうな垂れていた

「痛い、胃が痛い。」

一夏は違うことでうな垂れているようだが、俺はあの金髪ドリルのストレスで
胃がとても痛くなっていた

しかも、今は他のクラスからも女子が来て（俺達意外女子だが）
小声でこそこそ話している

俺はこういうのが嫌いだ、聞いているとイライラするのだ、
それによりさらに胃が痛くなりかなりやばい。

山「ああ、二人ともまだ教室にいたんですね、良かった。」

「なんすか？」

俺が顔を上げると同時に一夏も顔を上げた

山「えっと、お二人の部屋が決まりました。」

一「あれ、俺らの部屋って決まってないんじゃなかったんですか？
聞いた話だと一週間は自宅から通学だって。」

俺はホテルだが。

山「そうなんですが、事情が事情なので無理やり部屋割りを変えたそうです。」

一「まあ、分かりましたけど荷物はどうするんですか？」

あれ？ダースベイダーの曲が聞こえる

千「私が用意しておいた。」

「あれ？俺のプラモは？」

千「無理やりバッグに詰め込んだ、変な音がしたが大丈夫だろう。」

「うぅーーー。」

くそ、この人相手じゃ文句が言えない、

俺のガンプラが、

山「じゃあ、時間を見て部屋に行ってください。」

その後夕飯の時間や大浴場についてなどを聞き、今は部屋に向かっている

そして

「・・・いつまで着いてくるんですか？」

部屋の前でストーカーさんに話しかける

？「あら、気付かれちゃった。」

「何の用ですか？生徒会長さん。」

？「・・・なんで知ってるのかしら。」

「まあ、いろいろあって貴女の情報を見たんですよ、更織楯無さん。
まあ、詳しくは分かりませんでしたけど。」

半分嘘だ、この人の事は前から知っていた、原作でも出てたしね、
でも本当に詳しいことが分からなくなっている

楯「そう、よく考えるとあなたならできそうね。」

「まあ、別に誰かに言うわけじゃありませんから安心してください」

楯「そう、分かったわ。」

「所でなんでストーキングなんてしたんですか。」

楯「少し興味があったからね、男のＩＳ操縦者で篠ノ之束と同じく
らいの天才
普通は気になるでしょう。」

「そうですか、じゃあ、部屋に入るんで。」

楯「ええ、それじゃ、またあとで。」

そして俺は部屋に入り、数分すると、誰かが入ってきた

きっと同室の人だろう

楯「ハロー」

「何でいるんですか？更織さん。」

楯「だってここ私の部屋だもの。」

「ｒｅａｌｌｙ？（本当ですか？）」」

楯「何で英語？ええ、まあ本当よ、面白そうだから一緒の部屋にしちゃった。」

「そんな、てへ、みたいな感じで言われても」

楯「まあ、いいじゃない、それにお願いもあるし。」

「却下です」

楯「何にも言ってないじゃない。」

「絶対面倒なことですから。」

楯「残念ながら拒否権はないわ、内容だけどあなたには生徒会副会長になってもらうわ。」

「はあ、仕方が無いですね、まあ、いいですけど。」

楯「ありがとー」

突然楯無さんが抱きついてきた

「ちょっと、あんまり抱きつかないでください」

楯「別にいいじゃない、減るものじゃないし。」

「俺じゃなかったら、襲ってるかも知れませんよ。」

楯「あら、別にいいのよ襲っても。」

「やめてください、本気にしたらどうするんですか。」

楯「うーん、責任を取ってもらおうかな」

「はあ、ほんとに疲れる。」

ため息をつきながら様子を見る。

楯「にこ♪」

うん、すごいかわいい、じゃなくてなんて人たらしなんだろう

「もう疲れたんで寝ます。」

楯「じゃあ、そっちのベッドを使ってね」

「はい」

そして俺は眠りについた

同居人？（後書き）

この続きどうしよう

クラス代表決定戦　その１（前書き）

今回はセシリア戦のパート１です。

クラス代表決定戦　その１

朝、俺はいつもと同じくらいの時間に起きた
しかし、違和感がある、何故か動けないのだ、
何事かと布団を捲ると、静かに寝息を立てている楯無さんが抱きついていた

「あれ、なんで居るんだ？」

楯「う～ん、おはよう。」

楯無さんも起きたようだ

「ちょっと楯無さん、なんで居るんですか。」

楯「だって、ここ私のベッドだもの。」

「俺言われた場所に寝ましたよね？」

楯「ええ、でもあなたのベッドとは言ってないわ。」

「じゃあ、あっちに寝ます、ってあれ！？」

そこには昨日はあったはずのベッドが無くなっていた

楯「会長権限で撤去しちゃった。」

「マジですか？」

楯「ええ、本気と書いてマジと読むわ。」

「はぁー」

昨日一日過ごしただけで分かった事がある、
この人に逆らうだけ無駄だと言う事だ

楯「そんな事より朝食を食べに行きましょう？」

「別に良いですけど、早く着替えてくださいよ。」

今の楯無の服装はYシャツに下着、
はっきり言って目のやり場に困る

楯「気になるの？」

そういって、俺の腕にしがみ付いて来る、
腕に柔らかい感触が、

「ちょ、くっついてますって。」

楯「ふふふ、えっちぃなぁ。」

「楯無さんがやったんでしょうが」

楯「まあまあ、時間なくなるわよ？」

「はいはい、じゃあ入って来ないで下さいよ。」

そういって洗面所に入り着替え始める

そして着替え終えるて洗面所から出ると既に着替えた楯無さんが居た
楯「じゃあ、いきましょうか、おねーさんお腹すいちゃったわ。」
「はいはい」

食堂

いま俺は朝食を食べている、普段なら簡単なことなのに
俺は多分今までで一番手間取っている。

その理由がやはり

楯「はい、あーん」

楯無さんだ
なぜかさっきからずっと食べさせようとしてくる
昨日この人に逆らったら一時間以上くすぐられた、
本当にあれはやばかった、腹筋が破壊される所だった

そうなると

「あ、あーん」

食べないと駄目なんだよね

そしてこれが毎日になり
あっという間にクラス代表決定戦当日となった
しかしまだ一夏の機体が届かない
一夏対ドリルの勝者と戦うから、俺もひまなんだよね。
それになんか一夏と箒の間で妙な空気が流れている
一「なあ、箒」
箒「何だ、一夏」
・・・空気が重い
一「気のせいかもしれないが」
箒「そうか。気のせいだろう」
一「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」
ああ、そういうことか。
箒「・・・・・・・・」
もしかして
一「目　を　そ　ら　す　な　っ」
そういえば一夏の奴毎日剣道場に行ってたな

一「・・・・・・・・」

箒「・・・・・・・・」

うう、耐え切れない

山「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

ナイス、山田先生

一「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

山「は、はい。す～は～、す～は～」

一「はい、そこで止めて」

山「うっ」

おいおい、本気で止めてるぞ、冗談通じないよな、この人

一「・・・・・・」

山「・・・ぷはあっ！ま、まだですかあ？」

たぶんやめさせるタイミングを見失っただけだと思います

千「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パァンッ！

相変わらずすごい音だ

一「千冬姉」

ああ、バカだな、そんな事言ったら

パァンッ！

もう一発来るに決まってるだろ

千「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね。」

そりゃあ教師の台詞じゃないですよ

山「そ、そ、それでですねっ！きました！織斑くんのＩＳ」

やっときたか、待ちくたびれたぜ

それなのに

あれだけ待たせたのに

――――――勝者、セシリア・オルコット

何で負けてんだよ、このバカ野郎！

まあいい、次は俺の番だ！

クラス代表決定戦　その１（後書き）

ぜひ感想お願いします

クラス代表決定戦　その２（前書き）

今回でクラス代表決定戦は終了です。

クラス代表決定戦　その２

「ヴァリアス、タイプセレクト　デスサイズヘルカスタム」
そう言うと体にデスサイズヘルカスタムの装甲が展開される
「さあ、わがままお姫様にお仕置きをしようか」
そしてピットからアリーナに降りる
「さあ、はじめようぜ」
セ「・・・・・」
あれ？返事が無い
「おい、ドリル頭」
セ「はっ！？すいません、少し考え事をしてました」
ああ、そういえば一夏にフラグが立つんだっけ
別にドリルは好きじゃないから別にいいけど
「さっさと始めようぜ」
セ「わかりました、始めましょう」
そしてブザーが鳴った

「いくぜ！」

まず俺は鎌を振り、斬撃を飛ばす

セ「その程度の攻撃！」

セシリアはその攻撃をかわす、しかしその先にはすでに俺がいた

「はあっ！」

そして斬撃を当てる

セ「くっ！まだですわ！」

セシリアは距離をとり、ビットを飛ばしてくる

「そんな攻撃に当たるわけ無いだろ」

俺はビットをかわしながら壊していく、

「さっさと終わらせようぜ」

全てのビットを壊すと俺はハイパージャマーを使う

確かあれにはミサイルが隠されていたはず

姿が見えなければ当てられないからな

セ「どこに行きましたの！？」

やべ、見てておもしろい

「こっちだよ」
俺はセシリアがこっちを向くと同時に鎌を振り下ろした
どうやらその一撃でシールドエネルギーが尽きたようだ
『試合終了、勝者、神杉来斗』

パンッ！
試合を終えてピットに戻ると織斑先生の出席簿が待っていた
「いったぁー！」
千「遊びすぎだばか者、束からの情報だと開始数秒で終わるはずだ」
確かにストライクフリーダムとかクアンタ使えばいけるかも知れない
「でもそれならそれで怒るでしょ？」
千「まあ、そうだな。ほどほどにしろと言う事だ」
「了解です」
千「では、今日はゆっくり休め」

クラス代表決定戦　その２（後書き）

戦闘描写がすごく難しいです

ちなみにヒロインは楯無とシャルの予定です

セシリア戦後　部屋にて（前書き）

すいません、ＦＦ零式ばっかやってましたテストも近いのに・・・・

セシリア戦後　部屋にて

セシリアと戦った後、俺は部屋に戻っていた

「はあ、今日はなんか疲れたな」

ＩＳってまだ慣れてないからな、しょうがないのかもしれない

そう考えているうちに部屋に着いた

「早く寝よ。」

ガチャ

楯「お帰りなさい、ご飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

バンッ！

幻覚だな、うん、きっとそうだ

いくら同じ部屋だからって、楯無さんが裸エプロンで居るわけがない

でもなんでよりにもよって裸エプロン

そんな特殊な性癖があったのか、俺は

いや、そんな訳がない、たまたまだ、たまたま

では気を取り直して

ガチャ

楯「お帰りなさい、私にする？私にする？それともわ・た・し？」

もう現実逃避はやめよう、これは正真正銘本物の楯無さんだ

楯無さん、止めさせないと毎日この格好で待ってそうだからな、

でも言葉で言っても聞きそうにないしな、

だったら、

「それじゃあ、楯無さんを貰いましょう」

そう言って俺は楯無さんをベッドに押し倒す

「楯無さんが誘ってきたんですからね」

耳に息を吹きかける

楯「ふあぁ、あ、あれは冗談で」

ふふ、かわいいな

「楯無さんは俺じゃ嫌？」

楯「そ、それは、その・・・」

楯無さんみたいな人ってからかわれるのに大抵慣れてないんだよね

でもかわいそうになってきたな

「ははは、楯無さんってからかわれるのに慣れてないんですね」

楯「え？どういうこと？」

「ふふ、さっきまでのは冗談ですよ」

楯「も、もう！おねえさんをからかっちゃだめよ」

「でも、次あんな格好したら本当に食べちゃいますよ」

これできっと、もうやらないはず

楯「そのときは、責任を取ってもらうわ。」

あれ？

「えっと、どういうことですか？」

楯「一生を共にしてもらうわ」

酷くなってるよね！？

「それって要するにけ、」

楯「はいはーい、夕飯たべにいきましょー」

むう、遮られてしまった

でも顔が赤かったし、まんざらでもないのかな？

でも、楯無さんも一夏ラバーズに入ってなかったっけ、

まあ、もともと俺が居る時点で原作ブレイクしちゃってますけど

この日から何故か夜に楯無さんと寝るとどきどきして寝れなくなった

セシリア戦後　部屋にて（後書き）

シャルロットまで遠いなぁー
楯無さんもキャラあってるかわからんし
書いてみるとかなり難しいですよね

それと、ぜひ感想お願いします

代表決定！（前書き）

すいません、テストが近く、勉強の合間に書く感じなので
１１月２４位までの間、投稿が遅くなります

代表決定！

翌日、朝のＨＲ

山「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。
あ、一繋がりでいい感じですね！」

はは、一夏の奴めっちゃ暗い顔してやがる

一「先生、質問です」

山「はい、織斑くん」

一「俺は昨日の試合に負けたのに、なんでクラス代表になってるんですか？」

山「それは――――」

セ「それはわたくしが辞退したからですわ」

一夏に惚れてから態度は変わったけど
いちいち腰に手を当てるポーズやら上から目線な言葉、変わらないな

？「君はなぜ辞退したんだ？」

耳ではなく、頭から聞こえる声

「まあ、一夏には強くなってもらわないと駄目だからな」

？「そういう事にしておこう」

ちっ、コイツには面倒だからやめたって事が気付かれてやがる

あ、ちなみにコイツのことを説明するには数時間前にさかのぼらなくちゃいけない

数時間前

「ふあぁ、ふぅ」

いつもの時間に起きると楯無さんが隣に居た、
ただひとつ違うのは前まであったYシャツが無くなり、
下着だけで寝ている

まあ、こういうのにはもう慣れたけどね

しかし、それ以外にも違うところがあった、
腕時計が腕に付いていた

（あれ？おれ時計なんて持ってなかったよな？）

すると、頭の中に声が響いてきた

神『おひさしぶりです、来斗さん』

『あんたあの時の神か？』

神『ええ、そうです、今回は用件があってきました』

『なんだ？用件って？』

神『実は以前に渡し忘れたものがあったので』

『あの腕時計のことか？』

神『はい、あれにはＡＩが入ってます、ちなみに投影も出来ますよ』

『なんだよその近未来的な腕時計！？』

神『ちなみにＡＩは自分で選べますよ』

『種類は？』

神『えっと、ティエリアとかフェルトとかキラとかアスランとかですね』

『声って外の聞こえるのか？』

神『それは大丈夫です、声は今みたいに頭に響く感じなんで、まあ、外部音声も使えますけど』

『じゃあ、用件は終わりか？』

神『後ひとつだけ、あなたがこの世界に来たことでイレギュラーな存在が出現したようでそれを壊して欲しいんです』

『目印とかは？』

神『あなたと同じＭＳです』

『ＭＳだな、分かった』

神『くれぐれも気をつけてください』

『ああ、分かってるよ』

神『それでは』

って事があったのだ

前まであったハロは楯無さんにあげた、水色の小型のボディーにして何でも仕事の手伝いに使うそうだ

まあ、情報処理能力が高いからね

それじゃあ、戻って

一「じゃあ、来斗でいいじゃないですか」

見苦しいな、一夏

「俺も辞退した」

一「何でだよ！？」

「お前なあ、よく考えろ、お前は狙われてるのに今の弱いままだったら何があるかわかんないだろ？」

一「まあ、それはそうだな。そこまで考えてるとは、見直したぞ」

「まあ、実際は面倒だったからだけど」

一「ちょっと見直した俺が馬鹿だったよ」

ふっ、やっぱりこういうのは楽しい、悪趣味？そんなことはありません

もう少し遊ぼうか

「そうだよ！お前は馬鹿だ！」

一「ひどっ！そこまで言うこと無いだろ」

「否定できるのか？」

一「うっ、それは」

千「おい、いい加減に話を進めるぞ、そして織斑が馬鹿なのは昔からだ」

ダースベーダー登場

一「千冬姉まで！？」

やっぱ馬鹿だ、禁句言いやがった

バシンッ！

千「織斑先生だ」

一「すいませんでした」

ものすごい勢いで椅子の上で土下座をする一夏

千「クラス代表は織斑一夏、異存は無いな？」

はーいと全員（一夏除く）が返事、

俺は返事をしながら、せめてかまってあげようよと、

一夏を見ると、まだ土下座をしている

ティ『君のせいな気がするんだが』

聞こえない、聞こえないよ、ティエリアの声なんて

そんな感じで朝のＨＲは終わった

代表決定！（後書き）

友達にこの小説について聞いたら、なんか足りないって言われたのですが、自分ではよく分からないので、アドバイスお願いします

お祝いパーティー（前書き）

遅くなってすいません
もうすぐテストが終わるので

お祝いパーティー

千「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。
織斑、神杉、オルコット。試しに飛んで見せろ」

この人はほんと強引だな、と思いながらもやらないと怒られるので
展開をすることにした

「ヴァリアス　タイプセレクト　ウイングゼロカスタム」

そういうと一秒もしないうちに装甲が展開される
周囲からは『きれい』や『かっこいい』という声が聞こえる

まあ、ウイングゼロカスタムだからな、翼がすごい綺麗なんだよね

千「おい織斑、早く展開しろ。神杉を見習え、
熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

一夏のやつ、まだ展開してないのか。
まったく、遅いな

その後、一夏は無事に展開、しかし、上昇スピードが遅く、また怒
られていた
しかも下降の時、すごいスピードで俺に落下してきた
まったく、ティエリアが教えてくれなかったらどうなってたか

まあ、後は武装展開の時も遅いって言われてたなー、
俺？もちろん大丈夫だったよ？
一夏は授業終了後もグラウンドの穴埋めに時間を使っていた

・・・・・・・・・・・・・・・

『というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！』

はい、なぜこんな状況なのか、情報を整理しよう

部屋に戻る→時間を潰す→クラスの女子が来る→食堂につれてこられる（今ここ！！）

情報整理完了っと

まあ、面白そうだからいいかな？

『いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がねえ』

『ほんとほんと』

『ラッキーだったよねー。同じクラスになれて』

『ほんとほんと』

おい！そこのやつ！お前は二組だろっ！

ていうか、明らかに一クラス以上の人数居るだろ！

まあ、こんな状況の女子に何を言っても無駄だろう

俺もせいぜい楽しもう

そしてひとまず腹の減った俺は飯を食おうと思ったのだが

？「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏くんと神杉来斗くんに特別インタビューをしにきましたー！」

オー、と皆が言う、なんでオー？

薫「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部の副部長やってまーす。

ハイこれ名刺」

何で名刺持ってんだよ

ていうか滅茶苦茶画数多いな、めんどくさそうだ

薫「ではまず織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ああ、俺もあとから言わなきゃいけないのか、めんどい

一「えーと・・・・

まあ、なんというか、がんばります」

薫「えー。もっといいコメントちょうだいよー。

俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

うわッ！ふるッ！

一「自分、不器用ですから」

こっちもふるッ！

薫「うわ、前時代的！」

貴女もです

薫「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

いやッ！駄目でしょ！

薫「じゃあ、来斗くんコメントお願い」

「ああはい、俺に近づいたら・・・たべちゃうよ」

ばたっ！

あれ？何人か倒れちゃった、どうしたんだろう

薫「い、いいコメントをありがとう

それじゃあ、専用機持ちの集合写真を撮らせてね」

先輩はさっさと俺達を引っ張っていって、並ばせた

薫「それじゃあ取るよー。３５×５１÷２４は？」

「７４、３７５です」

薫「ご名答！」

パシャ

あ、あれ？何故か全員はいってる、なぜ？

あの一瞬に移動したのか！？

その後の部屋で

楯「いやー、来斗君凄いこと言ったねえー」

「何のことですか？」

楯「さっきのパーティーの取材の時よ
俺に近づいたら食べちゃうよだっけ、じゃあ私も食べられちゃうのね」

およよ、て感じで崩れ落ちるふりをする楯無さん

「安心してください、嘘ですから」

楯「あら、それは残念。それじゃあ早く寝ましょう」

「はいはい、わかりましたよ」

ベッドに入ると当たり前の様に楯無さんが抱きついてくる

楯「それじゃあ、お休み」

「おやすみ」

そして俺は眠りに付いた

お祝いパーティー（後書き）

つぎも宜しくお願いします

転校生はセカンド幼なじみ（前書き）

懲りずにテスト週間中に投稿です
まあ、一様やるにはやりましたが・・・

あ、あと、今書いてる『インフィニットストラトス零式』で
アンケートを取ってるのでこっちもお願いします

転校生はセカンド幼なじみ

翌朝

『織斑くんと神杉くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？』

「「転校生？」」

朝、教室に入るなりクラスメイトに話しかけられた

まだ四月なのに転校か、

確かＩＳ学園は転入には厳しい条件があったはずだよな

『そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ』

「「ふーん」」

セ「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

イギリスの代表候補生登場

まったく腰に手を当てるのいい加減に止めて欲しいんだけどな

箒「このクラスに転校してくるわけではないのだろう？

騒ぐほどのことでもあるまい」

あれ？箒？さっきまで窓際に居なかったか？

一「どんなやつなんだろうな」

アンタの幼なじみです

箒「気になるのか？」

一「ん？ああ、少しは」

箒「ふん・・・」

一夏の奴多分違うこと考えてるな

まったく鈍感な奴だ

箒「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？

来月にはクラス対抗戦があるというのに」

セ「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。

ああ、相手ならこのセシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。

なにせ、専用機を持っているのはこのクラスでは、

わたくしと来斗さんと一夏さんだけなのですから」

一「まあ、やれるだけやってみるか」

セ「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

箒「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

『織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー』

まあ、無理だろうな、上手く飛翔する事も出来ないんだからな
セシリアの時はちゃんと使えてやがったくせに
って気付いたら周囲が女子だらけだ
『織斑くんがんばってねー』
『フリーパスのためにもね！』
『今の所専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、
余裕だよ』
一夏も気の毒に、と考えていると不意に別の声が聞こえた
？「ーーーーその情報、古いよ」
見てみると、腕を組み、片膝を立ててドアにもたれている・・・えーと
一「鈴・・・？お前、鈴か？」
そうそう、鈴だ。
りんと聞いてコイツじゃなくて鏡音リンを想像した俺は悪くないはず
鈴「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。
今日は宣戦布告に来たってわけ」
ふっと小さく笑う
一「何格好付けてるんだ？」
鈴「んなっ・・・！？なんてこと言うのよアンタは！」

なんだ、演技だったのか。
ちょっとコイツのこと忘れかけてたから分からなかった
ティ「そういえば、原作の知識を幾らか消してるらしいぞ」
久しぶりに登場、ティエリア！
『そういうのは先に言おうぜ』
ティ「すまない、忘れていた」
『おいおい、頼むぜ』
ティ「次からは気をつける」

はい！今回の出番終了ー！

千「お前も早く席に戻れ」
あれ、ｗｈｙ！？（なぜ！？）何であいつら居ないの？
話してる間に戻ったのかよ！？

そして今日もＩＳの訓練と授業が始まる

転校生はセカンド幼なじみ（後書き）

実は私、学校でお前オタクじゃない？とか言われてます
まあ、あんまり気にしてないですが
そんなにボカロって悪いですかね？

自分の気持ち（前書き）

はい、テスト勉強で徹夜してる合間に投稿です

自分の気持ち

その日の放課後、一夏の特訓を手伝ったあと、シャワーを浴びたり、夕食を食べたり
して、現在時刻八時過ぎ
くつろぐムードの俺はお茶を飲みながら本を読んでいた、
すると楯無さんが話しかけてきた

「ねえ、最近冷たくない？」

「そうですかね？」

毎日一緒に寝てるけど

「最近あんまりヤラないじゃない？」

はっ？

「なにをですか？」

なにかしてたかな？

「ん～と、こういうことかな」

そういうと楯無さんは俺を床に押し倒す

「ちょっ！そんなこと一回もしてないですよ！」

「あら、この間してくれたじゃない」

まさかあれか

「あれはからかってやったんですよ！？」

「そんな、あそこまでやったのに、やっぱり私との関係は遊びだったのね？」

「いやいや、そんな関係じゃないですし」

「じゃあ、即成事実を作りましょうか」

え？冗談だろ？冗談ですよね？

「やめ！止めてください！！」

この人じゃ本当にやりかねない

「ふふ、それじゃあ」

顔を近づけてくる楯無さん

え？近い近い、俺の顔との間残り十センチ！

「止めてください！マジで！」

「ふふ、じゃあ」

どかぁぁん！！

突如隣の一夏の部屋から爆音が

そしてその振動で机の上の本が何か言いかけた楯無のヘッドに落下

「痛っ！んむ！？」

「んむ！？んん！？」

目の前には楯無さんのドアップの顔そして

・・・唇に柔らかい感触

え？ええ！？

「ぷは！な、なにするんですか！楯無さん！？」

「え？ああ、ええ」

やばい、フリーズしてる

「楯無さんおきて！起きないとまたキスしますよ？」

「ええ、喜んで！」

あ、目覚めた

「じゃあもう一回しましょう」

「今の冗談です」

「ええ～、そんな～」

てか軽いな！

「きにしないんですか？キスしたの」

「ええ、初めてが貴方なら」

はい？

「冗談ですよね？」

「さあ、どうかしら？」

やばい、はめられた！

「ちょっち一夏殺ってきます」

「やりすぎないようにね」

「さあ？わからんな？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

楯無視点

うう、キスしちゃった
事故とはいえファーストキスだったのに・・・
でも初めてが彼で良かった、
ふふ、もうこれは惚れちゃったかな？
でも次はもっといいムードでやりたいかな

・・・・・・・・・・・・・・・

もどって来斗視点

俺はいま一夏の部屋の前に居る、音が聞こえないし
寝てるのかな、かな？
やばい、なんか変なスイッチはいった
まあ、いいや
とりあえず・・・

「死にさらせ！織斑一夏ぁ～！！」

案の定部屋には一夏だけ、かと思いきや箒が居た
でもそんなのかんけいねえ！

「ファーストキスの責任を取りやがれ！」

あれ？なんか言い方間違った？

「は？なんの事だ？俺にそっちの趣味は無いぞ！」

「お前のせいで俺は初めてのキスをうばわれたんだ！」

「な！？まさか！一夏ぁ！」

箒、参戦

「ちが、箒、ごか」

メキっ！ゴキっ！

「頼む、やめ」

「「聞く耳もたん！」」

バキっ！ゴシャ！

「ああ！駄目！その間接はそっちには・・」

メキャっ！ゴキュっ！

「「まあ、こんなものだろう」」

「・・・・・・・・・・・」

後に残ったのは動かなくなった一夏の屍のみ、一件落着！

さあ、部屋に戻ろう

・・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は戻って自室

「ねえ、来斗くん」

「なんですか？」

「その敬語止めてくれない？」

「なぜですか？」

「なんでも！」

そういって覆いかぶさってくる楯無さん

「言わないとまたキスするわよ」

「わかった！楯無！」

キスに比べたらお安い御用だ

「ぶう、そんなに私とのキスは嫌？」

やばいです。

涙目上目づかいの楯無

「いや、嫌じゃないけど」

「じゃあ、良いじゃない」

ええ？だめでしょ

「駄目だろ、付き合っても無いんだから」

「私の事嫌い？」

「さあ？どうだろう？」

「ぶう、いじわるぅ」

頬を膨らませた楯無もかわ、ゲフンゲフン

「早く寝ないと一緒に寝ないよ？」

「わかった！」

そういって布団に入って抱きついてくる

「・・・私はこんなに好きなのに」

「・・・俺は・・・好きなのか？」

・・・二人のつぶやきは相手には聞こえなかった

自分の気持ち（後書き）

はあ、テスト勉強めんどいなぁ。
あ、［ＩＳ　零式］のアンケートも宜しくお願いします

クラス対抗戦（前書き）

またまた懲りずに投稿
あはは、終わったね、いろんな意味で

零式はアンケート結果が出ないと書けないので
ベースは作っておきましたけど

クラス対抗戦

後日話しを聞いた所、あの謎の振動は一夏が鈴を怒らせた際に
ＩＳの部分展開で壁を殴ったせいらしい
・・・後日再び一夏をボコった

あの後、楯無さんが妙に積極的になったんだよね
まあ、前から積極的だったけどさ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

んでもって試合当日
第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴
もうすでに鈴と一夏はアリーナにスタンバイ中
でもさ、何で甲龍って書いてシェンロンって読むんだろ
シェンロンってあれだよね、星入りの玉七つ集めると出てくる龍
おっと、試合が始まる

開始早々一夏は押されていた、あの馬鹿でかい青竜刀を避けるのに
苦労してやがる
そして俺は内心
（やれ！もっとやれ！殺してしまえぇぇ！！）
と、そんな時、一夏が吹っ飛ばされた
（うっしゃあ！ナイスだ鈴！）
うん、皆の敵だね、おれ

ドガァァン！！

そんな思考のなか、アリーナに異物が落ちてきたのだが
『おい、来斗。二十キロ先の海上にイレギュラー反応だ』
『あの神が言ってた奴か、タイプは？』
『タイプは・・・な！？サイコガンダムにデストロイガンダムだと！？』
『は！？相当やばいだろ！さっさと行くぞ！』
俺はアリーナの方を一夏達に任せ、気付かれないようにアリーナの外に出ようとするが
ハッキングでシェルターが降りていて出られない
「ちっ！めんどいがやるしかない」
俺はＩＳを呼びだす
「ヴァリアス、タイプセレクト、ストライクフリーダム！」
俺はＩＳを展開すると、シェルターをビームサーベルで切り裂く
『時間が無い、急ごう！』
「ああ！」
俺は最高スピードでターゲットに向かった

・・・・・・・・・・・・

千冬サイド

「織斑先生！二十キロ先の海上にアンノウン反応です！」

試合中に謎の機体が現れたと思ったら、山田先生が言う

「それは本当か？」

「はい、なっ！？アンノウンに向かう反応これは

・・・神杉君です、神杉君がアンノウンと接触しました！」

「通信は取れるか？」

「やってみます！」

・・・・・・・・・・・・・・

来斗サイド

『来斗、通信だ！』

「んだよこのくそ忙しい時に！つなげろ！」

たった今、目標に接触した時にティエリアに言われた

『分かった』

『おい！神杉！何をしている！』

千冬さんの怒鳴り声

「何って、こいつらと遊んでるんですよ」

『お前、そいつらが来るのを知っていたのか！？』

「いえ、ついさっき来たばかりです」

『まっていろ今教師を援軍に送る！』

「いえ、止めてください。はっきり言って邪魔です！」

こんな歩く要塞と教師じゃ二分と持たない

『何を言って』

「すみません、切ります！」

まだ相手には気付かれてないな

「おい！ティエリア、ドラグーンの操作は任せる！」

『了解』

「さあ、行くぜ。こっから先は瞬き禁止だ！」

まず、陽電子リフレクターがあり、時間のかかる

デストロイは後回しでサイコから倒すことにする

「行け！ドラグーン！」

まずドラグーンをデストロイに飛ばし、デストロイの注意を引いておいて貰う

そしてヴォワチュール・リュミエールシステムを発動、光の翼が放出される

そして超高速で接近し、ビームサーベルで右の指のビーム砲を切り落とす

その勢いのまま、左側に回り、同様に指を切り落とす

全身がGによって軋むが無視し、ハイマットフルバーストをうち、沈める

「ティエリア、そっちはどうだ？」

『まだ一機も落されてはいないが、エネルギーがもう切れる』

「じゃあ、こっち終わったから一回戻れ」

『了解』

そういうと、翼にドラグーンが戻っていく

「コイツにはビームサーベルしか効かないからな。

ヴァリアス、タイプセレクト、ガンダムエピオン！」

ビームサーベルだったらコイツだよな

「さっさと元の居場所に引き返しやがれ！」

俺はビームサーベルを空に掲げ、巨大になったそれを持ったまま一回転する
そしてその後には、真っ二つになったデストロイが海に沈んでいった

「・・・切捨て御免」

『なに格好つけてるんだ』

「まあ、いいじゃん。こんな時くらい」

『ふ、それもそうだな』

「さて、戻りますか」

『帰ったら先生の説教だな』

は！忘れてた

「そういえば、無断で出てきたんだっけ。そういえば一夏達は？」

あいつらに任せてきたからな

『原作と違って再起動もなく、けが人も出なかったそうだ』

「そうか、そりゃあ良かった」

原作だと一夏が怪我するからな

・・・俺が帰ったらボコれなくなる

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

千冬サイド

「海上のアンノウン反応消失、神杉くんが帰還します」

「やれやれ、あいつにも困ったものだ、しかしいったい誰が？」

「織斑先生？」

「いや、なんでもない。神杉の方のアンノウンの回収を。あと、神杉をレベル４エリアに呼んでください」

レベル４エリアとはその言葉どうり、レベル４以上の権限を持った人物しかは入れないエリアだ

「了解しました」

・・・・・・・・・・・・・・・・

来斗サイド

「で、なんの用ですか？」

おれは今、織斑先生に呼ばれて、地下の良く分からない空間に居るそこにはアリーナに落ちてきた、無人機と、サイコ、デストロイがあった

「・・・この二機どうやって運んだんですか？」

いくらスケールダウンしてても、十数メートルはあるんだけど

「教師五人で運んだんだ。ここには隠し通路があるからそこから運んだ」

そんなものまであるのか

「所でそっちの無人機ですけど」

俺はアリーナに落ちたほうの無人機を見る

「ああ、お前もそう思うか？」

「はい、多分あのウサギがやったんでしょう」

「それよりもこっちだ」

織斑先生はサイコ、デストロイを見る

「未開発のビーム兵器に陽電子リフレクター、オーバーテクノロジーの塊だぞ」

「ええ、まあそりゃそうでしょうね」

「お前が知っていることを洗いざらい吐け！」

「ええ、だったら俺の昔話から話さないといけないんですけど。」

「聞こう」

「その前に確認しますが、絶対に言わないでくださいよ。
話してもいい人は俺が信用した人だけですから」

「分かった、約束しよう」

「まず、俺はこの世界の人間じゃない」

「なっ！？どういうことだ！？」

「もともと俺は、違う世界で普通に生きていた。
そこに車に轢かれそうな猫が、俺はそれをかばい、死亡って感じです
そして目が覚めたらあら不思議、不思議な空間に居ました
そしてそこには神様が居て、俺の助けた猫が神様の親友のペットだ
ったわけです
それでそのお礼って事で俺の世界で見てたアニメのガンダムをＩＳ
にして
この世界に転生させてもらいました。
しかしその時に不具合があって、そいつらみたいなのが出てきた訳
です」

「ふむ、確かに信じろと言うほうが無理だが、
目の前に居るのだから信じるしかないな」

「ちなみに俺はそいつらをイレギュラーって呼んでますが、
そいつらは装甲が特殊なんで基本的に俺にしか倒せません」

ＰＳ装甲とか、ほとんどのＩＳの武器が効かないからな

「わかった、イレギュラーが現れたときは知らせよう」

「と言うか、そろそろ寝ても良いですか？」

「本当なら懲罰物だが、まあこの件は許しておこう。ご苦労だった」

「はい、それでは」

・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わって自室

「来斗、今日はずいぶん活躍したわね」

部屋でシャワーを浴びて寝る準備をしていると

楯無に言われた

「まあ、な」

「あれは何だったの？」

「まあ、お前なら話してもいいか」

そして俺は織斑先生に話したのと同じ事を楯無に教えた

「そうだったの」

「ん、まあ、こっちの方が楽しいから良いんだけどな、てかむしろ感謝してる」

「ふふ、あなたらしいわね」

「まあ、俺は俺だからな」

「それじゃあ、今日はご苦労様」

チュッ

「お、おい！？何を！？」

「今日がんばったご褒美よ」

「だからってそんな」

「良いから良いから、早く寝ましょう」

うう、いったいなんだ？楯無は俺の事が好きなのか？
そんな考えを遮るように睡魔が襲ってきた

・・・・・・・・・・・・・・・

楯無サイド

来斗に聞いた彼の秘密、やっぱり驚くけど
嬉しいとも思った、私に秘密を教えてくれたから
それでも、秘密を知っても、もっと、もっと、もっと彼の事が知りたい
こんなに人を好きになるなんて初めてだ
凄いどきどきして、凄い胸が苦しい

でも凄くしあわせ
すごく彼が愛おしい

・・・ずっと私と一緒に居てほしい

クラス対抗戦（後書き）

今日も徹夜ですよ。
ほんとテストなんて消えればいいんだ

ちなみにこの小説のヒロインは楯無だけじゃなくシャルもです
まだ楯無しか出てないですが

緊急アンケート（前書き）

今回はアンケートです

緊急アンケート

緊急アンケートです

ええと非常に申し上げづらいのですが、この小説のヒロインを楯無一人に
絞ろうかなと思っています

読者の方々も楯無だけの方が良いって人や、
ここから入れるのは無理がある

などの意見をいただきまして
楯無一人がいいか
シャルも入れるかを聞きたいと思います

もしシャルを入れない場合
ＩＳ零式の方が大体ストーリーが出来てるので、
それが完結した後にまったく違う物としてシャルがヒロインのを作ろうと思います
それについても意見をお願いします

緊急アンケート（後書き）

締め切りは早く続きを書きたいので十一月二十六日にしたいと思います

休日と告白（前書き）

すいません昨日のうちに投稿すると言ったのに出来ませんでした

ヒロインはアンケートの結果、楯無に決定です

そして今回読むとき注意してください

・・・何かは聞かないでください

休日と告白

六月頭の日曜日。
俺は楯無との待ち合わせ場所に向かっている
その理由は昨日・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえ、来斗」

「ん、なんだ？」

いつも通り部屋でくつろいでいると、不意に楯無に話しかけられた

「明日は暇？」

明日か、うーん明日ねえ

「特に用事は無いが」

「じゃあ、デートに行きましょう！」

「はあ、どこに行く気だ？」

コイツの事だから知らないで行くのは危険だ

「えーと、服を買って、後は遊園地に行きましょう」

「意外とまともだったな」

「だって折角の休日で仕事が無いんだから、楽しみたいじゃない」
俺ら生徒会は休日でも、書類の整理などをしている
・・・本音だけは居ないが、
本音の姉の虚さんいわく、居ないほうが作業が進む、だそうだ
まあ、あの性格だとね・・・

「まあ、別にいいけど」

「ほんとに？」

「ああ、本当だ」

「ふう、良かった」

「なんだ？断られると思ってたか？」

「う、まあ、それは、ね」

「まあ、俺も久しぶりの休日で一人ってのも寂しいからな」

一夏は、えーと、弾だったか。そいつの家に行くって言ってたし
かと言って他に誘う奴も居ないし

「それじゃあ、駅前で買い物してから遊園地でいいか？」

遊園地は少し遠いから電車を使って移動しないと駄目だから
時間を考えるとその方が良いだろう

「ええ、じゃあ八時に駅前に集合ね」
「なんでだ？同じ寮で同じ部屋だろ？」
「もう、分かってないわね」
ああ、雰囲気とかそういう系か
「ああ分かった分かった。」
「なら良いけど。じゃあ、今日は寝ましょう」
確かに遅れると悪いからな
「ああ、そうしようか」
・・・・・・・・・・・・・・・
って事があったから
で、今その駅前では、
『いいじゃん、俺らとどこか行こうぜ？』
「すいませんが、人を待ってるんで」
楯無がナンパされていた
ってことで、やることは決まっていて・・・
『そんなやt、ぐはっ！』

助けるのがお約束だろ？

「いやー、いい度胸してますね。人の連れに何してくれてんですか？」

『この野郎！』

『死ねぇ！』

「ああ、共通の言語を持ってないのか。猿か、あんたは？」

そして数分後

『ご、ごめんなさい』

『す、すいません』

「ああ、なんて言ってるの？日本語で話してくれない？」

ゴキュっ！

『『ああー！？』』

はい、ゴミの片付けしゅーりょー！

「さあ行こうぜ、楯無」

「ええ、分かったわ」

・・・・・・・・・・・・・・・

ここは駅前のショッピングモール【レゾナント】

で、今俺達は服を選んでいる

「どっちがいいと思う？」

楯無が出したのは、黒のワンピースと水色のワンピース

「やっぱり楯無には水色じゃないか？」

「うん、じゃあそっちにする」

で、服を選びえてから

「他には何か買うものは？」

「えっと、後はブランケットを」

ブランケットってあのひざ掛け位の毛布みたいなのだった気がする

「何に使うんだ？」

「何って、暖まるのに使うのよ」

まあ、確かにそりゃそうだな

「まあ、早いとこ買おうぜ」

遊園地に行く前に少し飯を食って置きたい

「じゃあ、これにするわ」

「ちょっとでかくないか？」

楯無が持ってきたのは、普通の毛布ほどじゃないけど
かなり大きめのものだった

「こういうのは大きめの方がいいのよ」

「そうか、まあいいんだけど」

「それじゃあ、早く行きましょう」

「ああ、分かったよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして会計を終えて、今は昼食を食べに来ている
その店は結構お高い店だが、金は有るから大丈夫だろう

「じゃあ、私はナポリタンとミルクティーで」

「俺はカルボナーラとアイスティーでお願いします」

『かしこまりました』

「そういえば今度の学年別トーナメントだけどやっぱりタッグ戦になると思うわ」

「そうか、それで俺は結局どうなるんだ？」

俺も一応副会長だからそういう情報は回ってくるんだが
お前が出たら絶対優勝じゃない？ってことで出られるかどうかが分からなかった

「えーとね、来斗と私は出たら試合にならないから、
教師と一緒にピットで試合を見てる事になったわ」

「そうか、まあ仕方が無いな」

『お待たせしました』

と話してると料理が届いた

で、今度は・・・

「はい、アーン」

「あ、あーん」

楯無にはいあーんをされている
だってしょうがないじゃん！楯無が左の指をワキワキさせてるんだもん

「来斗のも一口頂戴」

「あ、ああ、あーん」

「あーん。うん、おいしい」

凄い疲れた、いや悪い気はしないけどさ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

でさらに場所は移り遊園地
荷物を入り口で預かってもらい
遊びに行くところで再び問題が発生

「おい、離れて歩けよ」

「カップルは腕を組んで歩くものよ」

「まだカップルじゃねえだろ」

それに腕を組むときに自然にその、胸がね
楯無って標準よりもあるからその、嬉しい感覚が腕に・・・

「ふふふ、どうしたの？顔が赤いわよ？」

しまったぁ！はめられたぁ！

「なんでもない、さっさと行くぞ」

「はいはーい」

それでまずはジェットコースター

「ね、ねえ、これはやめとかない？」

ほ～う、めずらしいな、楯無が慌ててるぞ

「駄目だね、もう後ろに結構並んでるし」

「うう、来斗のいじわる」

「大丈夫だって、ほんの数十秒だから。ほらほら、さっさと乗るぞ」

「・・・分かったわよ」

とうとう観念したか

ガタンッ！

ロックの外れる音が聞こえてコースターが動き出す

まずはお約束の上りから始まる、が

その上りの高さがハンパじゃない、上を見上げると首が痛くなる。

隣の楯無は相当怖いみたいで、俺の腕にしがみついてふるえている

そして頂点に達すると同時に・・・

ガコンッ！

かなりの高さから九十度近くの角度で落ちる

「きゃあああああああああ！！！」

「うおおおっ！」

凄いGが体にかかる

隣の楯無は

「・・・・・・・・・・・・・（チーン）」

あ、ヤバイ死んでる

そして無事終わった

「もう、許さないんだから」

「ごめんごめん。あそこまでとは思わなかったんだって」

「次はまったりしたやつにしましょう」

そういって楯無が指差すのはコーヒーカップ

「わかったが、あんまり早く回すなよ？」

「分かってるわよ」

そして乗ると、やはり

ギュワアアアア！

「止めろぉぉ！楯無！」
ものすごい速さでカップを回す楯無、
コイツ高いのは駄目なくせに回転するのは大丈夫なのかよ
「ふふふ、さっきのお返しよ」

その後はフリーフォールなどを乗った後、観覧車に乗っている
そういえば、恋人の相性を見る奴で百パーセントになったなぁ
観覧車で景色を見ていると、楯無が話し始めた
「ねえ、来斗」
「ん？なんだ？」
チュッ
話しかけられたので、振り向いたら楯無にキスをされた
「今日は楽しかったわ、ありがとう」
「まったく、お前はそんなにキスするって、俺のことが好きなのか？」
「え？そうだけど、知らなかったの？」
「しらねえよ！ってことは何だ？
俺はずっと片思いだと思ってたら両思いだったと？」

「え？来斗は私の事好きだったの？」

「いや、好きじゃない奴にキスされたら怒るだろ？」

「じゃあ、もちろん付き合ってくれるわよね？」

「それは喜んでうけるが、良いのか？」

「良いって何が？」

「俺は、転生者だし、俺と居たら危ないかもしれないぞ？」

「そんなの聞くまでもないわ、それに危ない時は助けてくれるんでしょう？」

「ふふ、分かったよ、楯無」

「それじゃあ、もう遠慮しなくて良いのね」

「え？何をだ？」

「こういうこと」

ガバッ

楯無が俺に抱きついてきた

「おいおい、キスとかしてたんだからそれくらい普通じゃないか？」

「いえ、ほんとはもっとやりたいけど、もう下に着くから」
気がつくと既に観覧車はかなり下の所まで来ていた
「そうか、それじゃあ、帰ろうか？」
「ええ、門限に遅れたら大変だしね」

・・・

「いいのか？」

「ええ、と言うよりももっと前に襲ってもらおうと思ってたんだから」

「そうか、分かった。でも今夜は寝かさないぜ？」

「でも初めてだから、優しくして、ね？」

「わかんないけど、努力はする」

詳しくは書けないが、次の日には買ったばかりのブランケットに血と白濁が着いていて、二人が抱き合っていた

・・・

休日と告白（後書き）

はあ、テストで書けなかった分が今回で出ましたね
いきなり何書いてるんだろ、おれ

二人の転校生（前書き）

今回もちょっとやりすぎたかな？
まあ、大丈夫ですかね？

二人の転校生

「ふあぁ、ふう」

いつものように目を覚まし、伸びをする
いつもと違うのは、隣の楯無と俺が一切何も纏っていない事だろう
昨日の夜、コイツを抱いてから事が落ち着いたのは早朝５時で
少しだけ仮眠を取ることにしたのだ
そして現在６時３０分、登校まではまだまだ時間があるが楯無を起こす

「お～い、たてなし～、おきろ～」

「う、ん？来斗？」

「もう朝だぞ、早く起きろ」

「うん、分かった」

良かった、いつもより遅く寝たから起こすのに苦労するかと思った

「ねえ、来斗？」

「ん？なんだ？」

「責任取ってくれるんだよね？」

ああ、その事か。確かにあそこまでしたからな

「ああ、安心しろ。ずっと一緒に居てやる」

「うん、ありがとう」

そういって抱きついてくる。
俺は抱きしめ返して、優しいキスをする

「来斗、大好き」

「ああ、俺もだよ」

コンコン！
「おーい、来斗」

その時、部屋をノックされたのだが、
その時俺は楯無に夢中で聞こえなかった、楯無も同じく・・・

「おい、入るぞ！」

そういって入ってくる一夏
その視線の先には抱きしめ合ってキスをする俺と楯無

「あ、あれ？」

「え？ええ！？」

「おい、一夏いい度胸してるな！」

上から一夏、楯無、俺だ

「死ねえ！一夏ぁ！」

ナイフを持ち、一夏に切りかかる

「おい！？止めろって！」

「問答無用！」

「ちゃんとノックしただろ！？」

「少しは察しろよ！」

「騒がしいぞ！何の騒ぎだ？」

言い争っていると、隣の部屋だった箒が入ってきた

そして俺は楯無にアイコンタクトをする

『楯無、箒を一夏にぶつけろ、俺が襲われそうになったとでも言えばいい』

『了解』

そして楯無が箒に耳打ちする、するとどんどん箒の顔が赤く染まっていく

「おのれ一夏ぁ！やはりそっちの趣味があったのか！？」

「な！？箒！」

「死ねえ！」

「止めろ！」

結局この騒ぎは織斑先生が来るまで続いた、そして帰り際に
「そういう事をするならほどほどにしろよ。
見回りが昨日は私だったから良かったが、外に声が聞こえていたぞ」
と言われた

声か、うかつだったな。
あんまり注意してなかったぜ

・・・

「そうよ、私達は付き合ってるのよ」

ってええ！？

「おい！楯無！？言って良いのかよ！？」

「あら？知らなかったの？私独占欲が強いのよ？」

そういってキスをしてくる楯無

するとそれを合図のように

『『『きゃあああ！！』』』

うわ、うるさッ！

しかも喜んでる奴も居れば、めっちゃ沈んでる奴も居る

まったく朝から元気な奴らだ、まあ俺も人のこと言えないけど

「まったくお前は、まあそんなお前に惚れたんだけどな」

「ふふ、私もよ」

周囲に桃色の空間が・・・

『あ、あの』

『お邪魔みたいなので』

『失礼します』

耐え切れなかったか
俺も目の前でこんなイチャイチャされると逃げたくなるしな

・・・

二人の転校生（後書き）

転校生の話なのに終盤しか出せませんでした・・・
次話はシャルとラウラが登場します

それにしてもまだテスト後の影響が抜けません・・・
零式は出来れば明日か明後日辺りに出します

銀髪軍人と金髪貴公子（前書き）

・・・ほんとになにをかいているんだろうぼくは・・・

銀髪軍人と金髪貴公子

「シャルル・デュノアです。フランスから着ました。
この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルがにこやかな顔でそう告げて一礼する。
俺以外の奴らは皆あっけにとられていた

『お、男？・・・』

いや、たしか女です

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」

んん、まあ、知らなければ男に見えないことも無いな
男の娘ってところかな

『きゃ・・・』

ふ、今回は抜かりないぜ、この耳栓がある
これを装着すれば声なんて・・・

『きゃあああああーーーーーーーーーっ！』

なっ！？耳栓も効果が無いというのか！？

『男子！三人目の男子！』
『しかもうちのクラス！』
『美形！守ってあげたくなる系の！』
『地球に生まれて良かった～～～～！』

まったく、元気なことで、俺は昨日のk、ゲフンゲフン！
これは思い出さないようにしよう。息子が起きてしまう

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

もう鬱陶しいんだろうな、織斑先生って割りと分かりやすいよね

「皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

あれぇ？山田先生、居たんですか？気がつかなかった

ていうか、普通の奴だったらあんな盛り上がりの後だとやりづらいだろうに
・・・今回の人は普通じゃないですけど。
だって・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

いまだに口を開かないんだぜ、普通じゃあないね

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ああ、やっぱりその呼び方なんだ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、
ここではお前も一般生徒だ。織斑先生と呼べ」

「了解しました」

めんどくさい奴だな

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

まったく、これが一夏に惚れるんだもんな。
世の中分からんことばかりだ

「あ、あの、以上ですか？」

「以上だ」

空気に耐え切れなくなった山田先生がラウラに聞くが、即答される
凄い泣きそうになっとるぞ
っとヤバイ、そろそろあのイベントだ。ここはぶっ壊したかったんだ

「！貴様が－－－」

よし、いくぜ！

バシッ！

「貴様！邪魔をするな！」

「・・・・・・・・・・・・」

俺は黙って手を握る力を強める
俺の力だと、コンクリでも簡単に砕けるから力は抜いている
まあ、抜いていてもかなりの痛みだろうがな

「いい加減にしろ！」

とうとうキレたラウラがナイフを抜き、構える
そしてそれで切りつけてくるが、俺は迷うことなくナイフの刃を握る

「どうした？そんなもんか？俺だったら指一本で倒せるぜ」

喋っている間も俺の手を伝って血が垂れる

「ふん、できるものならやってみろ」

お、言ったねー、こいつ

「じゃあ、お言葉に甘えて」

俺は中指を親指で押さえる、いわゆるデコピンの構えを取る

「もう一度だけチャンスをやる」

「出来るものならやってみろ」

あーあ、最後のチャンスだったのに

「皆さん、証言は取りましたよ。
じゃあ・・・死ね！」

思いっきり引き絞った指をラウラのデコに当てると同時に、

ドゴッ！

壁に思いっきり叩きつけられるラウラ、まあ手加減はしたよ。
本気でやったらぶっとぶ所か、頭が無くなる

「がはっ！」

「忠告はしたぜ、黒ウサギさん」

バシンッ！

「何をしている！」

「いやいや、あいつが一夏を殴るのを止めたら、ナイフなんて出してきたんですから
正当防衛でしょ？そもそも俺は指一本でやったんですから、まだましですよ。
グーで殴ったらあいつの体が消し飛びますよ。」

「限度を考えろ！もっとやり方があっただろう」

「だから指一本でかなり手加減してあれなんですって！
デコピンで本気だったら壁を突き抜けてますよ」

「もういい！ラウラも席に戻れ！」

「はい」

いつの間にか復活したラウラが席に戻る

「まあ、いいや」

俺も席に戻る

「いろいろ騒ぎがあったがこれでＨＲを終わる。
神杉は保健室に行ってからアリーナに来い、以上だ！」

・・・

そして俺は第二アリーナに急いで移動したのだが・・・

「おい、神杉。今から生徒会室に行って来い。更織の奴が呼んでいた、
おそらくこの授業中は戻れないだろうから、午後の座学には出席しろよ」

「あれ？止めないんですか？」

普通なら止めるのに

「お前ならあいつが一回言い出したら止めないのは知ってるだろう？
それにこの学園の生徒会長は教師よりも権限が大きいんだ。
あいつに命令できるのは理事長ぐらいだろう」

「どうもすいません」

「いや、去年からだからな、もう慣れたよ。そんな事より早く行って来い」

「はい、分かりました」

・・・

「えっとね、ちょっと合いたくなったから」
「はあ、まあいいや。少しはなしがある。
うちのクラスの転校生、ありゃどういう事だ？お前なら知ってるだろ？」
「シャルル・デュノアの事ね？」
「いや、シャルロット・デュノアのことだ。何で男装なんてしてたんだ？
まあ、実家がデュノア社ってのを考えると大体は分かるが」
「来斗って本当に情報が早いのね。そこまで知ってるって。
まあ、きっと広告塔か一夏くんと来斗に近寄るためでしょうね」
「やっぱりか、まあ聞きたかったのはそれだけだ」
「じゃあ、さ、いい？」
何を言い出すんだ。コイツは
「駄目だ、夜まで待て」
「うう、我慢できないよ」
このやろう、前よりも対処が大変になってきた
「空腹は最高のスパイスってな」

「・・・来斗の意地悪」

「今はこれだけで我慢しろ。授業中に来てるんだから今は無理だ」

俺は楯無を抱きしめてキスをする。

俺はすぐ離れるつもりだったのに楯無に顔を抑えられ、舌を入れられる

「・・・んぅ・・・くちゅ・・・・ん・・はぁ・・・」

そしてぴちゃぴちゃと音を立てて、深い方のキスをする

「はあ、はあ・・・なんだよ、そんなにやりたいのかよ？」

「・・・うん」

もう、今のキスのせいで理性が振り切れそうだ

「まったく、エロイお嬢様だな」

「来斗のせいだからね。こんな風にした責任取ってよ？」

「・・・それ前もしなかったか？」

「今回のは婚約よ」

そういって色っぽく微笑む楯無

「ああ、誓うよ。大好きだ、楯無」

「・・・うん、私も。もう離さないからね」

「こっちの台詞だよ」

そして今度は、普通の触れるだけのキスをする

そして二人の行為が終わる頃には昼になっていた
生徒会室が教室から離れていたのが不幸中の幸いだろう

銀髪軍人と金髪貴公子（後書き）

生徒会長の権限については部屋を変えられるんだから、
教師よりも権限は大きいだろうなーと

そして次こそは普通の話を書きたいなと思います

シャルル先生の講習（一夏の）（前書き）

何とかできました。
零式もいま同じようなところなので同じところを
何回も書くのは疲れるんで、多少変えました

シャルル先生の講習（一夏の）

俺はいま、ケルディムで光学迷彩を使ってアリーナに隠れている
なぜかって？そりゃあ今シャルル先生の講習を受けてる一夏を
あの黒ウサギから守るために隠れてるんだよ
まあ、隠れてるのはあの黒ウサギがビビッて出てこないかもしれな
いからだ

バンッ！バンッ！バンッ！

・・・何あれ、一夏の後ろからシャルルが抱きつくように手に手を
重ねて教えてる
なんだ？めっちゃ笑ってるぞ、どっちもホモか？まあ、シャルルは
女だが

『ねえ、ちょっとアレ・・・』

『うそッ、ドイツの第三世代だ』

『まだ本国でトライアル段階だって聞いてたけど・・・』

おお、ウサギが罠にかかったな。

「・・・・・・・・・・」

やはりＩＳのハイパーセンサーでもこの光学迷彩は見えないらしく
俺の存在には気付いていないようだ

「おい」

「・・・なんだよ」

一夏も朝に殴られそうになったことからあまり気が進まないようだ

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

まったく、コイツドンだけ戦闘好きだよ。

とある超電磁砲を思い出すぞ

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様に無くても私にはある」

はあ、まったくなんでコイツはこんなにも・・・

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。

だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

・・・歪んでいるのだろう

「また今度な」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる」

そう言った瞬間に肩の大型の実弾砲から弾が出る。

俺はそれを狙い打つ

ちなみに今の俺の位置は一夏達を挟んでラウラと対面の場所だ

そして俺は光学迷彩を解く

「まだまだ甘いね。黒ウサギさんよお」

「貴様・・・！」

突然現れたのに驚きつつも、止めたことに怒っている

「また邪魔をするのか、貴様は」

一夏達は俺が現れたのが突然のことで、唖然としている

「まあ、人の連れに手を出すなら、何度でも邪魔をしてやる。」

「貴様ごときがこの私の邪魔をしようと言うのか」

「じゃあ逆に聞くが、その貴様ごときに指一本で負けたお前は何になる？

カスか？ゴミか？雑魚か？それとも・・・

失敗作か？」

「貴様ぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「お前は戦えない。なぜなら・・」

『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』
突如スピーカから音声が流れた、まあ、騒ぎを聞きつけた担当の教師だな
「ってことだ。さっさと帰れ」
「ちッ！・・・・今日は引こう」
興が削がれたラウラはゲートに向かう、おそらく向こうでは教師が怒り心頭で待ってるだろう
「よう、お前ら大丈夫だったか？」
「あ、ああ、助かったよ」
「来斗って凄いね。飛んでくる実弾を狙い撃つなんて」
「んー、まあそれがとりえだからな、この機体は」
「わたくしのブルーティアーズ以上の射撃性能ですわね」
「まあ、アレぐらいならＢＴでも出来ると思うぞ」
「いや、無理でしょ！」
うーん、そうかな？
「そんな事よりもうアリーナの閉館時間だぞ」

「おう。そうだな、そうだシャルル銃サンキュ。参考になった」

「それなら良かったよ」

にっこりと微笑むシャルルやっぱり見てると女に見えるな

ってそういえば今日ばれるンだっけシャルルの正体

どうすっかな

・・・

「よっし、そっちがその気なら、良いだろう！上等だ、
これからお前とは一緒に寝ない！」

「虚ちゃん！本音！まじめに仕事するわよ！」

まったく、普段からしっかりしてくれれば良いのに

・・・

「ああ、シャルルのことだ」
どうせ楯無は知ってるし構わないか
「一夏君にばれたの？」
「ああ、でも一夏なら大丈夫だろ。」
「で、あなたはどうするの？」
「ああ、デュノア社をぶっ潰すさ」
「出来るの？」
んー、束さんに頼むかな。めんどくさいし
「ちょっととある人物Tに頼むことにする」
でもあの人だとミサイルをぶっ放しそうだな
・・・

「じゃあ、お願いします」

「あ、一つだけ条件が」

「なんですか？」

「わたしに敬語禁止ねぇ」

「はあ、分かったよ束。じゃあ、宜しく」

「了解なんだよー」

ふう、やっと終わった

「・・・ほんとに知り合いだったのね」

「まあ、どこに居るかは知らないが」

あの人の研究所は世界中にあるからなぁ

まあ、ひとまず問題は一つ解消だな、後はラウラか

「ねえ、来斗ぉ、早くぅ」

まあ、今は楽しむとしよう

シャルル先生の講習（一夏の）（後書き）

次回の次くらいには学年別トーナメントに入れるかな？

そういえばもうすぐクリスマスなのでクリスマスの話を書こうと思っているのですがどうでしょうか？

再びアンケートです

ええっと、今回はＰＶ４００００アクセス、ユニーク７０００アクセス達成記念兼
クリスマスの話を作ろうと思ってます
そこで、読者の皆様にアンケートを取りたいと思います

１、達成記念にクリスマスの話を書く

２、達成記念とクリスマスの話、別々に書く

３、クリスマスの話だけでいい

４、達成記念の話だけでいい

の、以上です

達成記念の話の場合、どういうのが良いのかも一緒に送ってください

期限は２０１１年１２月９日までででお願いします

それでは次回もお願いします

とあるもしものｉｆ編〔Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ〕（前書き）

えっと今回のアンケートは票が全然来ませんでしたが、
その中にあった、クリスマスとアクセス記念を書くことにしました
ただし、この話はｉｆな話です

とあるもしものif編〔Merry Christmas〕

「ふぁ～あ、ふう」

雪の良く降る朝、俺は目が覚めた。

今日は十二月の二十四日、まあいわゆるクリスマスって奴だな、
そして俺は当然のように携帯を開く、するとやはり楯無からのメールがあった
この行動はここ数年のクリスマスの朝の恒例行事になりつつある
ＩＳ学園を卒業してから楯無は暗部の仕事でずっと更織家に居るため合う時間も少なくなったがこのメールだけは欠かすこと無く送ってくる
そして画面には

『午後六時に駅前集合、遅れたらバツゲームね』

・・・うんいつも通りだ、このバツゲームも
前に一度受けたが、とてもじゃないが他人には話せない内容だった
そして俺は準備を始める、俺の人生で多分一番デカイ事の準備を
・・・

学園を卒業してからはあんまり会えなかったけど、時々会うときに見せて
くれるあの笑顔はとても好きだ
そして彼の笑顔を見るとやっぱり私は来斗の事が大好きなんだと実感する

そして今日はその大好きな来斗に会う。
彼に伝えたいから、私の気持ちを・・・

・・・

「そういえば、簪ちゃんに彼氏が出来たみたいよ」

「おお、マジか」

「ええ、朝にどの服が良いかなって聞かれたわ、相当気合入ってたから
きっと間違いないわ」

楯無と簪は一夏と俺の助言で仲直りして、今じゃ聞いての通りだ

「あの簪がねぇ、人って変わるもんだな」

「そういえば一夏君はどうなんだろうね」

「ああ、あいつはまだ誰にするか決めてないし、時間が経つごとに
選択肢がどんどん増えて行ってる」

あのフラグ体質はほんとに直らないもんだ

「ふふ、相変わらずね」

「まあ、変わる人も居れば、その逆も居るって事だろ」

実際一夏に惚れてる奴らも何人か結婚してるしな
あ、原作の奴らじゃないよ

・・・

「そういえばさ、今更だけど楯無は何で俺に惚れたんだ？」

「・・・ほんとに今更ね。でも何でだろう？いつの間にか好きになってたのよ。」

「そうか。まあ、そんなモンだろうが」

沈黙、

『ああ、俺！何か話題を考えろ！』

楯無も同じ状況らしく、さっきから無言だ

『はッ！一番重要なことを忘れてた！これを伝えないと」

俺の気持ちを・・・

「「楯無（来斗）！」」

楯無と被ってしまった

「ん？先にいいぞ」

「いや、そっちが先で良いわよ」

「んー、じゃあ、同時に言おうぜ」

「うん、わかった」

『はあ、同じ内容だといいな』

「それじゃあ、いっせーのーで」

「「結婚しよう（しましょう）！楯無（来斗）！」」

「あ、あれ？」

「楯無、今の聞き間違いじゃないよな？」

「・・・うん」

さすがに恥ずかしかったらしく、声が小さい

「それじゃあ、目つぶって、手だして」

「う、うん、わかったわ」

でも大体何かは分かってるだろうな

俺はあらじめ用意しておいた指輪を楯無の指に通す

「じゃあ、目開けて」

「うん」

「改めて、言わせて貰うよ。更織楯無さん、俺と結婚してくれませんか？」

はずかしい、なんてキザな言い方だろう

「はい、喜んで」

楯無は涙を流しながら応える

「なんで泣いてるんだよ」

「だって、嬉しかったから」

「だったら笑え、お前の泣いた顔は見たくないから」

「だったら泣かせる様なことしないでよ？」

楯無は涙を拭きながら言う

「当たり前だよ、お前のことは悲しませないよ」

そして二人の影が近づき、触れ合った

こうして、十八歳のクリスマス、俺達は結ばれた

・・・

楯無は更織の仕事を簪に任せ、今は俺と二人で暮らしている
そして今度更に一人家族が増えるんだ。
世界はまだ女尊男卑の時代だけど、最近は男でも使えるＩＳの開発が進んでいるから徐々に世界も元の姿に戻るのかな？

まあ、これだけは言える。
何があっても、俺は楯無達を守ってみせるって事だけは・・・

ｉｆ編ｅｎｄ

とあるもしものif編〔Merry Christmas〕（後書き）

・・・あれ？クリスマス関係なくね？
しかもめっちゃデジャブを感じる内容・・・

強さ（前書き）

今回機体の戦いかたが間違ってるかもしれません

後、ラウラ好きの人はご注意を・・・

強さ

翌日の放課後

俺は今日も生徒会室で仕事をしている

「なあ、楯無？」

「ん？なあに？」

「俺の学年別クラスマッチの参加は何とかならないか？」

あのラウラが出るとなると、けが人が出る恐れがある

「んー、来斗のＩＳに普通の訓練機だとけが人が出るかもしれないのよね」

「だったら・・・」

ドオーンッ！

「なんだ！？」

「第三アリーナからね」

まったくまたラウラか

「楯無、俺はいまからアリーナに行くから、織斑先生を呼んできてくれ」

「分かったけど、やりすぎちゃ駄目よ」

「わかんないが善処するさ」

そして俺は第三アリーナに走っていった

・・・

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、
貴様も有象無象の一つでしかない。・・・消えろ！」
肩のレールカノンが俺を標準に捕らえ・・・発射された
「なんだと！？」
レールカノンが俺に触れると、俺の姿は陽炎のように消えた
「はは、無様だな。偉そうにしながら俺の掌の上で踊ってるんだもんな。
さすがは失敗作といったところか」
俺は姿を消したまま動かず、ただ喋り続ける
「貴様ぁ！隠れるなぁ！出て来い！」
「ああ？出て行ってお前は俺に勝てるのか？指一本で負けたお前がか？笑わせてくれるな」
「うるさい！さっさと出て来い！」
まったくうるせえやつだな
そうおもいながら俺は姿を現す
「さあ、せいぜい踊れよ失敗作。俺の掌の上でな」

「もう貴様は許さんぞ！」

「ほんとに・・・ちっちぇな」

ラウラは俺にプラズマ手刀で切りかかってくる、
しかしまたその姿は陽炎のように消え去る

「甘いなぁ！まだまだだ！」

「くそっ！くそっ！くそぉ！」

その後もラウラは斬りかかってくるがその姿は次々と消えていく

「もう飽きたんだけど、いい加減にしてくれないか？」

「まだだ！まだ！」

諦めること無く斬りかかってくるがその刃が俺を捕らえることは無い

『少々やりすぎなんじゃないか？』

『まだまだだよ、こういうのは徹底的に潰す』

『まったく、やりすぎるなと言っていただろう？」

『・・・まあ、大丈夫だろ』

そして視線を再びラウラに向けると、もう既に目が潤んでいる
まあ、自分に唯一あると思っていた強さが否定されているんだから
な、

まったく、他にもいい所があるだろうに、何で気付かないのか・・・

「さてとそろそろ飽きてきたな。終わらせるか？」

俺はラウラの大振りの直後の隙に拳を叩きこみ、
シュピーゲルブレードを展開し高速回転攻撃を仕掛ける必殺技『シュツルム・ウント・ドランク』を
吹き飛ばされたラウラに食らわせる、それによりラウラのＩＳの装甲はボロボロになった
おそらくもう戦えるほどのエネルギーも無いだろう

「口ほどにも無いな。良く考えるんだな、強さとは何かを。
お前は織斑先生の強さしか見えていない、もっと他のところにも視野をひろげろ」

そしてアリーナに織斑先生と楯無が駆けつけてくる

「はあ、まったくやりすぎるなと言っただろう？」

「そうよ、まったくこんなにアリーナを壊して」

「ああ、すまん。それよりもそいつらを保健室に連れてってくれ」

俺はセシリアと鈴を指差す

「所で織斑先生、ラウラは昔からああなんですか？」

「ああ、あいつは私の教えで力を手に入れたが、それによって
力に溺れてしまったんだ」

「こっから先は俺には無理です、一夏が何とかしてくれるのを願うしかないですね。」

俺はトーナメントには出れないし、俺にフラグが立っても困るし

「・・・そうか、分かった。」

「そういえば来斗、やっぱりあなたはトーナメントには出れないわ。今回の戦いはこの間の無人機のような相手が現れたときの連携が目的だから」

「ああ、まあ大丈夫さ。俺はラウラさえ何とかなれば。まあ、そのためにも
一夏をもっと鍛えないと駄目だがな」

いまのままじゃ、ラウラには勝てないだろうからな

・・・

「さあ？何でこんなところに居るのかしら？」

！？この子のこの指輪はもしかして・・・・

「ーーーーこの子を運んで頂戴」

なっ！？こいつら俺をどこに連れて行くつもりだ？

く、そ・・・力が・・入らない・・

？サイドｅｎｄ

強さ（後書き）

最後のアレの正体は後になればわかるかと・・・

番外編　ウラノハナシ（前書き）

今回地の文が少ないです。

ちなみにこれはifじゃないですよ

番外編　ウラノハナシ

「おいーーーーコイツどうするんだ？」

アレ？オレはなんでこんなところに？

「ーーーーその子の指輪を見て何か分からない？」

「ああ？・・・なっ！？コイツ何もんだ！？」

ちっ、うるせえな

「おそらくこの子はこれを・・・ＩＳを使える男と見て間違いなさそうね」

「でもよ、ＩＳが使える男は織斑一夏だけのはずだろ？」

「でも実際に目の前に居るのだから認めるしか無いじゃない」

さっきから、何だよこいつら

「ところで、いつまで狸寝入りしてるつもり？」

「あァ？てめェらが勝手に喋りだしたンだろうが」

「ふふ、確かにそうね」

気にいらねえな、その澄ました態度・・・

「テメェ、さっきから聞いてりゃいい気になりやがって」

「止めなさい、オータム」

ああ？んだ、可笑しな名前だな

「ところであなたの名前は？」

「こういうときはそっちから名乗るのが礼儀なんじゃないんですかァ？」

「そうだったわね、私はスコール、こっちがオータム」

「おれは・・あれ・・・？オレの名前は・・・」

「どうしたの？」

「・・・思い出せねえ、オレの名前も、昔のことも・・・」

「記憶が無い？・・・確かにあんな所に倒れてたんだから無理も無いのかもしれないわね」

「ああ、そうか」

「ねえ、あなた。亡国企業に入ってみない？」

「なっ！？正気かよスコール、こんなどこの馬の骨かもしれねえ奴を」

「オータム、彼は戦力になるわ、体を少し見たけどあの筋肉の付き

方からしても
相当腕が立つのは間違いないわ」
「そんな体した奴はうたがわねェのか？」
「いえ、あなたがどこかに属しているのなら、とっくの昔に見つかってるはずだもの」
「ははははっ！面白い奴だ！いいだろう、乗ってやるその話！」
「それじゃあ、こっちに来て」
そのままオレは、別の部屋に移された
・・・

おれがＩＳを起動させると、頭の中に音声が流れてきた

『システムの起動を確認、遺伝子情報一致、メッセージを開放します』

『ふふふ、これを見てるって事は無事に展開できたようだな。
おそらく今の君は記憶が無いだろう、大丈夫だ、ＩＳの展開時に自動的に戻る。
君が下界に下りる際に記憶が消える恐れがあったのでな、ＩＳにバックアップがある
そして君のＩＳの名前は・・・『シャドウ』だ。
その世界には君と同じからだをした人物が居るはずだが、そいつは君の
フェイクだ、だから君にはそいつを殺して欲しい、それでは健闘をいのる』

「シャドウ、タイプセレクト、アルケー」

オレは無意識の内にその言葉を言っていた

そしてオレの体に血のように赤く、手足の異常に長い、あらわすのなら昆虫の様な
装甲が展開される、右手にはバスターソード、左手にはシールドをそれぞれ装備されている

「それじゃあ、あなたにはオータムの操る、アラクネと戦ってもらうわ」

そういうと、ハッチから背中から伸びた八つの装甲脚が目立つ、黄色と黒の禍々しい機体が出てきた

「さあ、かかってこいよ、クソガキ！」

「・・・雑魚が咆えるな」

「んだと！このやろう！」

ふん、本当に扱いやすい奴だ。挑発に乗りやがって

アラクネが突っ込んで来るが、俺は真正面にたち、シールドを展開、アラクネを受け止める。

「あめェんだよ！クソガキが！」

「ところがギッチョン！」

その体制のまま背中の装甲脚を振り下ろすが、おれは脚部からビームサーベルを展開、

一回転するようにし装甲脚を切り裂く、そしてその勢いのまま、バスターソードで切りつける

「っこのクソガキがァ！」

「そこまでよ」

激昂したオータムが突っ込んでくるが、スコールから、止めの言葉が告げられ、ぴたりと止まる

「何でだよスコール！」

「これはあくまでも、試験よ。もう彼の実力は分かったし、無駄に破損させることはないわ」

「っち、わかったよ」

しぶしぶと言った様子でオータムはハッチへ戻っていく

「あなたを改めて亡国企業は歓迎するわ」

「そうか。そういえば記憶が戻った、俺の名前は神杉来斗。オレのフェイクを倒すために来た存在だ」

「そう、ならそのあなたのフェイクを探すのも手伝うわ」

「そうか、ありがたい」

こうして神杉来斗？は亡国企業に入ることになった

番外編　ウラノハナシ（後書き）

さあ、果たしてコイツは誰なのか？
この先のストーリーで明かされます

学年別タッグトーナメント（前書き）

なんか今回かなり端折ったきがするな・・・

学年別タッグトーナメント

六月も最終週に入り、学園は学年別トーナメント一色に染まる。
まあ、オレには関係ないがな。
学年別トーナメントに出られない俺と楯無はピットで・・・
「はい、あーん」
「あーん」
いちゃいちゃしていた、今は備え付けのお菓子を互いに食べさせあっている
「おい、いちゃいちゃするのはいいが、ちゃんと試合はみろよ」
そこに織斑先生の注意が入る
「分かってますよ、織斑先生。はい、あーん」
「そうですよ、ちゃんと見ますって、あーん」
学園側の命令で此処に居るんだし、少しの勝手くらいいいじゃない、人間だもの。
えっ？人間なのは関係ないって？気にしちゃまけだろ
「あの、織斑先生。良いんですか？」
「更織は一年の頃から一度言いだしたことは止めないんですよ。

それにまだ大丈夫な範疇ですからね。
おい、お前ら、度が過ぎたら止めるからな」

「そ、そうなんですか・・・」

「おっ、楯無、トーナメント表が出たぞって、ええっ！？」

「ん？ああそれは、少しだけ細工しちゃった」

てへっ、って感じで舌をだす楯無、うん今日も相変わらず可愛い奴だ。
えっ？バカップル？何とでも言うがいい、私は私の道を行くだけだ

で、肝心のトーナメント表の内容だが、
一回戦、織斑一夏&シャルル・デュノアペアVSラウラ・ボーデヴィッヒ&篠ノ之箒ペア
絶対なにかあるとは思ったが的中だな

「ねえ、どっちが勝つと思う？」

「うーん、どっちだろうな？まあ、たぶんラウラが負けるだろうな。俺の言った言葉もあまり受け止めてなさそうだしな」

「かなりのワンサイドゲームだったじゃない、アレはさすがに酷いわ」

「いや、ただアイツに上には上が居るって事を教えただけだ」

「来斗の上なんているの？」

「さあ、織斑先生が同じくらいの機体に乗れば負けるかもしれないな」

「ほう、言ってくれるな。試してみるか？」

「良いですけど、機体の準備に時間がかかりますよ」

「別にかまわん。お前の実力も見たいしな」

あれ？いつの間にか決闘の準備が整ってる。

まあ、いいや、スサノオでもわたしとくか

・・・

『わかった、腕輪で良いよ、和風な感じの』

『了解だ、今からデータを写す』

これぞ、ヴァリアスの秘密機能が一つ、データ写しだ。
機体のデータを移し、ヴァリアス本体から切り離して使える機能
まあ、その機体は使えなくなるから、あまり使わないようにしてるんだが

『サンキューな』

出番を増やして貰える様に頼んでみるよ。

・・・

「いや、ここは一夏に任せよう、大丈夫だ、危なくなったら行く」
いまの俺には見守ることしかできない。
それに一夏自身が認めないだろうからな。

「まあ、大丈夫みたいだな」

視線の先には腕のみに装甲を展開した一夏、
そして・・・ラウラをＩＳの中から引きずりだした

そこに、アリーナ上空から降ってくる機体
その機体はアリーナのシールドを切り裂くと地上に降りてくる

「・・・ちっ、まったく此処は面倒事が絶えないな」

「今度は行くのね」

「ああ、アイツの相手はまだ俺しか出来ない」

しかし、アイツに感じるこの不思議な感じはなんだ？
・・・なにか嫌な予感がする・・・

学年別タッグトーナメント（後書き）

さあ、次回は来斗の出番です、お楽しみに

『皆を守るために俺に力を貸せガンダム！』

次回『二人の来斗』

二人の来斗（前書き）

今回、キャラが分かりずらくなってますので、
台詞の前に文字をつけました
一夏だったら
一「・・・・・」
など

二人の来斗

俺は全力疾走でアリーナ内部に向かう、そしてアリーナの内部に着くと、
目の前にはまったく動いてないイレギュラーが居た

『なんだ？なぜ動かない？まさか俺目当てか』

来「おい一夏、下がれ。俺が相手をする」

「来斗か？でも・・・」

来「うっせえ！さっさと戻れ！足手まといだ！」

「っく！分かったよ・・・」

エネルギーが尽きて、動けなくなった一夏をシャルルが、ラウラを箒が連れて行く

・・・大丈夫、大丈夫だ

来「ヴァリアス、タイプセレクト、ユニコーン」

『シャドウ、タイプセレクト、シナンジュ』

来「っな！？ヴァリアスと同じ能力だと！？」

ティ『まずいぞ、来斗！早く逃げろ！』

来『無理言うんじゃねえ、アイツの目的は俺なんだ。逃げられるわけ無いだろ！』

もし、どの機体にでもなれるなら。逃げ切れるわけが無い

裏「準備は出来たかい？フェイク」

つっ！もしかしてと思ったが、有人機か！

来「ああ？フェイク、何のことだ？」

裏「君は僕のフェイク・・・それだけのことだ」

来「そうかい、興味がないな・・・」

裏「まあ、いい。どうせ君は死ぬのだから・・・」

来「テメェ見たいなのに負けるわけ無いだろ？」

裏「ああ！？何つったテメェ！調子に乗ってんじゃねえぞ！」

なんだコイツの豹変ぶりは

裏「テメェ見たいなカスに俺が負けるだ？冗談言うんじゃねえよ！」

そういうと、腕にビームサーベルを展開させ、突進してくる

来「っつ！うっせェ！ここから、出て行きやがれぇー！」

俺もビームサーベルを展開させ、つばぜり合い、スラスターを全開

にする

裏「んなもんでオレに勝てるわけがねェだろうが」

来「なっ！？消えただと！？」

裏「こっちだカス野朗！」

声に反応して後ろを向くと、そこには既にサーベルを振り下ろしている

シナンジュの姿が

来「がァ！？この、やろ・・」

裏「どうしたよ！んなもんか？」

サーベルの一撃を受けた俺は、右肩から左の脇腹までの装甲が破壊された

来「うっせェ・・・、くっ」

シナンジュのビームサーベルは出力が高く、かなりのダメージを受けてしまった

裏「まだ分からないか？フェイクはオリジナルには勝てないんだよ」

声が最初のときと同じ落ち着いた声に戻る

来「悪いけど、まだ負けらんないんだ」

裏「ふん、良いぜ！せいぜい楽しませろよ」

俺はビームライフルを出し、数発打つ
そして数発ぶん残ったマガジンを投げ捨てる

そして回るようにして動き、あいつの居た場所に俺が、俺の居た場所にアイツが移動した

来「まだだ！まだ」

裏「はっ！むだむだ！」

シナンジュは後ろにステップし、俺の射撃を避けるしかし、その場所には
俺が投げ捨てたカートリッジがある

『掛かった！』

俺はわざと射撃を外すようにして、落ちているカートリッジにビームを当てる

裏「はっ！どこ狙ってんだ？」

来「掛かったな！」

裏「何言って、んな！？」

ビームを受けたカートリッジは爆発を引き起こす、
ビームマグナムのカートリッジには、普通のビームライフルの数倍

のエネルギーが
貯蔵されている。そのエネルギーの爆発だ、これなら・・・
裏「やってくれたな、フェイク風情が」
来「っつ！？アレで駄目なのか？」
裏「今日はもう終わりだ・・・。次は確実に殺す！」
何をおもったか、あいつは俺を見逃し、アリーナのシールドの穴から出て行った
来「はあ、いったいなんだったんだ。
・・・しかし、俺も弱いな、もっと強くならないと」
・・・・次は絶対に負けないぜ
・・・・

二人の来斗（後書き）

戦闘描写が難しい・・・
誰か教えてくれませんかね・・・

もしかまわないって人はぜひ教えてください
お願いします

改めて・・・（前書き）

ああ、今回今まで以上に駄文だ・・・

改めて・・・

その日の夜、俺は食堂で皆と夕飯を食べていた

『トーナメントは事故により中止になりました。ただし、今後の個人データ指標と
関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各人個人端末で・・・』

「なんかシャルルの予想通りになったな」

「そうだね、あ、一夏、七味取って」

「はいよ」

「ありがと。そういえば、来斗は体大丈夫なの？」

「ああ、まあ、薄皮一枚切れたが」

なんつうか、ほんと幸運だな。
さっきまで一応ってことで精密検査されてたからな、まあ何もないに決まってるが

「ふー、ごちそうさん。じゃあ、一夏、俺先に戻ってるから」

「ああ、じゃあな」

部屋に帰ったら楯無の説教かな？

・・・

「サンキュー、でもなんで入ってきてんの？」

「お背中を流しに」

「出てけ」

「嫌よ」

即答・・・このパターンは言うこと聞かないな・・・

「分かったよ、さっさと洗って出るぞ」

「ふふ、分かったわ」

そして、背中に当てられる、タオルのざらざらとした感触・・・・

では無く、妙にスベスベして弾力のある物体

「おい！？なにやってんの！？」

「背中を洗ってるのよ？」

今、楯無は自分の胸で俺の背中を洗っている、しかもご丁寧にスク水を上半身の部分だけ脱いでる

「せめて水着を着ろよ！」

「でも、今更じゃない。これで（ピー）なこととか（ピー）とかしてるんだし」

「そうだけど・・・」

俺の声は止まってしまった、後ろを向いた際に楯無の顔を見てしまったからだ、
その顔は今にも泣き出しそうな顔をしていた

「だって、だって。来斗は無茶ばっかりするから・・・。
今日も凄く心配なのに、何も出来なかった。だから、来斗の事を少しでも、
癒してあげたかったから・・・。なにも出来ないときらわれちゃうんじゃないかって不安になって」

俺は後ろを向くと、泣き出してしまった楯無を抱きしめる

「大丈夫だよ、どんな時でも俺がお前を嫌いになるなんてありえない。
むしろ、こっちが嫌われそうだと思ってたんぜ？
あと、無茶に関しては許して欲しいかな？大丈夫だよ、俺は絶対に死なないから」

「じゃあ、証拠を頂戴」

楯無はまだ潤んでいる目で、見てくる

「何をすればいいんだ？」

「私を、私に来斗以外の男が見えない位に、メチャクチャにして。
もう私は来斗無しじゃ生きていけないって思えるくらいに。
もっと私を愛して」

「・・・わかったよ。いいんだな？」

「うん、来斗だから・・・いいよ」

そして俺らは繋がった、今までとは違い避妊用具なんて付けないで、言葉通りに・・・

改めて・・・（後書き）

ああ、俺の頭がおかしくなってる気がする

『私はあなたを超えてみせる』

次回『師匠』

東方不敗じゃないですよ？

師匠&VS戦乙女（前書き）

今回ちょっと文が雑かもしれません

師匠&VS戦乙女

「ふぁ～～、ふう」

朝、カーテンの隙間から差込む朝日を浴びて、目が覚める。
腕枕している楯無の髪を少し撫でる

「ふぁ～あ、らいとぉ？」

「おはよう、楯無」

少しの間撫でていると、楯無が目を覚ました。
撫で続けていると、気持ち良さそうに目を細める

（なごむなぁ～、髪さらさらだ）

「ねえ、来斗ぉ～」

「なんだ？」

「おはようのキスはぁ？」

「ん、わかった」

そういってキスをする、
いや～人間って凄いね、前はあんなに恥ずかしかったのに

「んふぅ、大好きぃ」

そういって抱きついてくる楯無、
・・・これ寝ぼけてねえか？
そして一回見たことあると思った人・・・正解だ
完璧にデジャブだろ、この感じ

「俺も大好きだけど、早く用意しないと遅れるぞ？」

「きゃあ」

俺は楯無を抱き上げて、立たせる

「もうっ、強引なんだから」

「許せよ、このままじゃ遅れるぞ？」

「分かったわよ」

現在時間の四十分前、三十分で朝飯を食えば間に合うか

・・・

良くわかんないな、まあどうでも良いけど
まあ、たぶんあいつなんだろうけどな・・・

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

やっぱしアイツですか

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

クラスのほぼ全員がぽかんとしている
まあ、仕方がないだろうな

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。と言うことです。
はぁぁ・・・また寮の部屋割りを変えなくちゃいけませんね・・・」

なるほどね、そういうことか

「え？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことはーーーーー」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ざわざわと教室が喧騒に包まれる。

バシーン！

「一夏ぁっ！」

登場！怒り喰らう鳳鈴音！ＩＳハンター３ｒｉＧに出てくる！（嘘ですっ！）

イビルも尻尾を巻いて逃げそうだ・・・

そして俺は更に怒らせる

「一夏君の部屋からシャルロットちゃんの悲鳴が聞こえましたー

そして昨日二人で大浴場に入っていきましたー」

「こ、このっ！しねェ！」

両肩の衝撃砲がフルパワーで発射される

・・・ドンマイ、一夏。まあ、人生の最後に新聞の一面を飾れるぞ

『哀れ高校一年生男子、同学年女子に殺害される。死体は原型をとどめておらず、

クラスメイトは口々に悲しみの声を漏らす』

「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地面に落ちた柿でした」

「あるいはイチジクでした」「またはイビルに踏まれたケルビでした」←俺

「破裂した缶コーラでした」「あるいはペプシコーラでした」

「または初心者がバカして裸装備で大樽Ｇを蹴った後の状態でした」

↑また俺

おお、さすが俺、才能あんじゃね？

ズドドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

肩で息をする、恐暴竜〔鳳鈴音〕。

やはりスタミナが少ないのはイビルと変わらないか・・・

まあ、そこにラウラが居て一夏を助けたみたいだけど・・・

「助かったぜ、サンキューームグッ！？」

うん、いきなりだね。一夏がラウラにキスされた・・・

「！？！？」

「お、お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「・・・嫁？婿じゃなくて？」

突っ込むとこそこ？

「日本では気に入った相手を嫁にするというのが一般的な習わしだと聞いた。

故に、お前を私の嫁にする」

何その一般常識、そんなのが一般的だったら日本は終わってます

そしてそれをみた鈴たちが激昂、まさに四面楚歌の状況だと言っておこう
そしてラウラは俺の方にあるいてくる
「・・・私をあなたの弟子にしてください！」
はあ、めんど
「なんでだ？」
「あなたの強さに惚れました！だから私をあなたの弟子にしてください！」
頭を下げるラウラ
「じゃあ、まあ、いいけどさ」
「ありがとうございます、でも・・」
「ん？」
「いつかあなたのことを超えてみせます！」
はあ、まったく、まあ悪くはないか・・・
ドガアアアンッ！
シャルロットのシールドピアースで教室が揺れた

一夏、殺す！

・・・

「くッ」

俺は、けりをいれ、そこから追撃しようとする
しかし、体制を立て直すのがはやく、追撃できない

「やりますね！千冬さん」

「お前こそ中々やるな！」

そういうと、再び刀をぶつけ合う
しかし、俺は観客席に居る楯無を見つけてしまった

『負けられないよな！アイツが見てるなら』

「ヴァリアス、タイプセレクト、ダブルオーライザー」

「本気で行きますッ！トランザム！」

「いいだろう！トランザム！」

二人の機体が赤く染まる、そして、そこからは目に捉えられないほどの高速戦
千冬さんはシラヌイとウンリュウを連結させたソウテンで、
俺はＧＮソード？で斬りあう

「いまだッ！」

俺は千冬さんがソウテンを振り下ろす際に白羽取りで受け止め、
そのまま剣を折る

「なんだとッ！」

「これで終わりだ！」

俺はオーライザーの射撃とソードのライフルモードの射撃を一度に叩きこむ

すると、試合終了のブザーがなった

勝者　神杉来斗

「ふッ、負けてしまったな」

「まあ、でもまだ機体に成れてなかったんでしょう？」

「いや、ちゃんと機体を使えていた。だから今回はお前の勝ちだ。久しぶりに本気でやれたよ、ありがとう」

「いえ、こちらこそ」

そういって俺達は握手をした

師匠&VS戦乙女（後書き）

今年ももう終わりですね。
今年はあと一回程度の更新で終わりそうです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8657x/

ＩＳ　転生の翼

2011年12月18日00時52分発行